

2018年3月1日

みずほディーラーズアイ (2018年3月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 104.50 ~ 112.50

国際為替部 為替営業第二チーム 藤巻 龍太郎

先月の為替相場

先月のドル円は下落した。月初1日は、日経平均株価の大幅な上昇を受け円売りが優勢となり109.75円まで上昇。2日は日銀の指値オペ実施を受け109.90円超えまで上昇。更に米1月雇用統計が市場予想を上回ったことから110.48円まで上昇。しかし、その後は金利上昇等を背景に米国株が下落する中、ドル円は下落し110.19円で引け。週明け5日は、前週の米国株安を受け日本株が下落する中、ドル円も下落。米国時間にNYダウ平均株価が一時15000ドル超まで下落し、ドル円は109円割れまで下落。翌日も株安の動きは変わらず、リスクオフムードとなる中108.46円まで下落するも、その後は株が下げ幅を縮小する中、109円台まで回復。7日は、米上院指導部が債務上限について超党派の合意成立を発表し109円台後半まで上昇するも、米国株が再度下落する中、ドル円は下落。8日については、米国時間に株が下落する中、108円台まで下落した。

月中9日は、日経平均株価が大幅安となるも、黒田日銀総裁の再任決定との報道もあり109.32円まで上昇。その後は米国株安の動きを受け、108.05円まで下落するも、引けにかけては買い戻しが入り、108.80円で引けた。12日は本邦祝日の中、動意に乏しい展開が続く108円台後半でもみ合い。13日は、日経平均株価の下落を受け軟調に推移し、欧州時間には107.40円まで下落。翌14日は株の軟調な推移を受け、106.84円まで急落するもその後は反発。15日は、麻生財務相のコメントを受けドル円は106.30円まで下落。米国時間も流れは変わらず106.03円まで下落。翌16日も、106円ちょうどほどのストップロス巻き込みながら2016年11月以来となる105.55円まで下落するも、米国時間には良好な経済指標等を背景に106円前半まで回復してクローズ。

月後半19日は、米国や中国などの祝日を受け小幅なレンジでの推移となった。20日は、安倍首相の「消費増税による駆け込み需要や反動減などの経済のブレをコントロールする必要がある」との発言を背景に財政出動期待の高まりから107円前半まで上昇。その後はFOMC議事要旨の内容がタカ派的と捉えられたことから107円後半まで値を戻す展開。22日は、前日の反動からドル売りが優勢となったことや、ブラッドセントルイス連銀総裁のハト派発言を受け米金利は低下しドル円は106円台半ばまで下落した。26日は、米国株の堅調な推移を受け底堅く推移。27日は、パウエルFRB議長がタカ派なスタンスを示したことから、ドル円は上昇するも、28日にかけて106円台後半まで下落する展開となった。

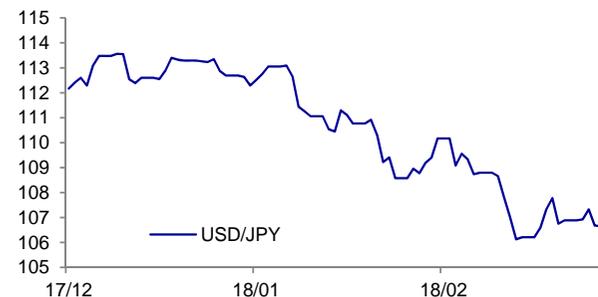
今月の見通し

今月のドル円については、引き続きボラタイルな展開を想定する。先月初の米国株を発端とした株価急落後、市場は落ち着きを取り戻しつつあるものの、米国株、各国金利、エマージング市場など、依然としてまちまちな動きをしている局面も見受けられ、相場が完全に落ち着いたとは言い難い。通常一度相場が『壊れる』とその後遺症(ボラティリティの上昇などを背景に保有可能ポジションが減少するなど)が様々な市場に波及することから、本当の落ち着きを取り戻すために多くの時間を要することが多い。現状の動きもまだそういったものの一環であろう。そのような中、円については、リスク資産動向に左右される動きが継続する可能性が高い。株・クレジット物などのリスク資産が上昇する場合は円売りであるし、その逆の場合は円買いで素直に反応するであろう。問題は米ドルである。米国自体のファンダメンタルズは良好であり、インフレも上昇しつつある。米国の金融政策としては、3月のFOMCでの一段の利上げが想定されており、場合によっては、現状2.75%となっている中立金利が引き上げられる可能性も予想されている。よって、基本的に落ち着いたところでは、ドルに買いが入るのではないかと考えている。また、インフレが一段と上昇するケースにおいては、これまで正常化の一貫として政策金利の引き上げを実施してきたFRBにとってインフレ抑制のために政策金利を引き上げるという要素が加わることから、利上げ速度が速くなる可能性もある。また、米国政治サイドでインフラ投資について何らかり具体的な内容が発表される場合等については、ドル円は上昇する可能性もある。

但し、ドルは買いでもそれ以外の通貨が更に買いとなる場合については、結果的にドル安となるので注意が必要。その代表格がユーロ。欧州景気は引き続き良好であり、ECBは利上げを含め引き締めに向け動き出そうとしている。これまでも引き締めをしてこなかった国が引き締めへ転ずる場合、数年前から既に引き締めを開始している米国よりも買いが入る可能性は高いのではないかと考えている。またもう一つ重要なのはエマージング通貨。今回の株価急落局面においてもこれらエマージング諸国は比較的堅調な推移を続けていた。今後もキャリー目的などからこういった国々へ買いが続く場合においては、結果的にドル売りとなる可能性がある。逆に欧州での景気悪化や政治懸念の拡大、エマージング通貨に売りが入る場合については、逆の動きとなる可能性もある。よって、今後のドルの動きを占う上では、ドルだけでなくその他の通貨の動きも鍵となる。

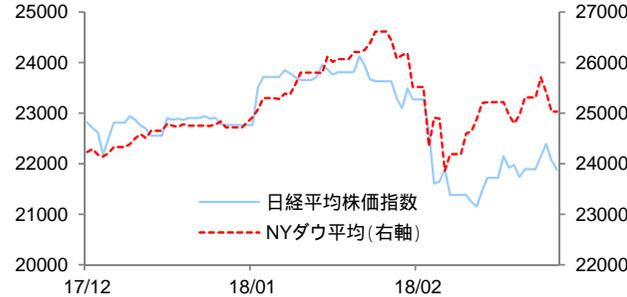
為替の動き

(資料) ブルームバーク



株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	米ISM製造業	1月	58.6	59.1	59.3
2/2	米非農業部門雇用者数変	1月	180K	200K	160K
2/2	米失業率	1月	4.1%	4.1%	4.1%
2/2	米平均時給(前年比)	1月	2.6%	2.9%	2.7%
2/5	米ISM非製造業	1月	56.7	59.9	56.0
2/14	米消費者物価指数(前年比)	1月	1.9%	2.1%	2.1%
2/14	米小売売上高(前月比)	1月	0.2%	-0.3%	0.0%
2/16	米住宅着工件数	1月	1234K	1326K	1209K
2/21	FOMC議事録	-	-	-	-

カスタマディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

ドル・ブル (5名、104.50~112.00、中心105.00~110.00)

加藤	106.00 ~ 111.00	2月の米消費者信頼感指数にも現れているように、米国のインフレ昂進がよい物価上昇と受け止められる公算が高いと思う。サイクル的には米国景気は崖を下る時が近づいてきていると思うが、時期はまだまだ先のようなのである。
佐藤	105.00 ~ 110.00	年度末の決算対策に係る外貨売りは、2月の急落局面で概ね完了。4月の新年度入り後に本邦機関投資家による外債投資が活発化すると期待を背景にドルは底堅い展開を予想。また、3月FOMCに向けて、年内の利上げスピードが加速すると期待が台頭すると思われることもドルの支援材料となりそうだ。
藤巻	104.50 ~ 112.00	先月の株価急落の後遺症からボラタイルな相場展開となる可能性がある。但し、景気は良好、インフレ上昇方向、引き締め継続のFRBの動向を考えると、落ち着いたところでは、ドルに買いが戻ってくるのではないかと考えている。よって、ブル目線とした。リスクは再度リスク資産が下落することか。
西谷	105.00 ~ 110.00	先月は米金利上昇懸念が高まり、株価急落を招いたが、マーケットは徐々に現在の水準に目が慣れて落ち着きを取り戻しつつある。かかる状況下、ドル円は買い戻される展開がイメージしやすく、また水準的にも108円を上抜けたタイミングでは一段と上昇するリスクに注意しておきたい。
鶴田	106.00 ~ 110.00	米株急落ショック後のリスクオフは半分後退した印象。ボラタイルな株価を懸念してかドル円は米金利の上昇に素直に反応出来ていない模様。先日パウエル氏からボラタイルな金融市場による悪影響はないとの見解が示され、同懸念も半分後退した様子。米金利動向に素直に反応する中で堅調推移を予想する。

ドル・ベア (6名、103.00~110.00、中心104.00~109.00)

田内	104.00 ~ 109.00	トランプ政権による貿易不均衡是正の強化やセーフガード発動等、米国の保護貿易主義に軸足を置いた通商政策に対する警戒感や、想定為替レートを下回る水準での本邦企業による年度末決算に向けたリパトリ等に対する警戒感も加わりドル円の上値は重いと見る。
山下	103.00 ~ 108.00	FOMCメンバーのタカ派発言が飛び出す度に株式市場は過敏に反応しており、今月のFOMCで追加利上げが断行されれば、米国発の世界的な株価暴落が懸念される。つまるところ、追加利上げをしようがしまいが、リスク回避的な円買いになると考える。
矢野	104.00 ~ 109.00	年4回程度の米利上げを織込む動きとなっているが、足もとのドル円は金利差をテーマとして動いていない。財政不安等から悪い金利上昇が進む中、リスクセンチメントの改善にはまだ時間が掛かるだろう。当面は下値リスクが意識される展開が続くと予想。
岡本	103.80 ~ 110.00	株安ショック明けのパウエル氏議会証言でリスクオンの地合いに変わりつつある点がサポートするも、上値の重い展開は変わらず。米金利上昇がドル買いの材料とならない中、3月FOMCの利上げ後にドル売りが広がり、105円割れを試す可能性にも警戒したい。
森谷	104.00 ~ 108.50	米1月雇用統計の発表以降、米金利の上昇が素直にドル買いにつながりにくい状況となっている。今月のFOMCでは利上げが実施される可能性が高いものの、その場合は株安の進行からリスクセンチメントの悪化につながると予想。一段の下落リスクに警戒したい。
大熊	104.00 ~ 109.00	ドル/円と米長期金利の関連性は薄れており、3%を目前にしてもドルの上値は重い。米景気は堅調で、3月の追加利上げはほぼ織り込み済みにも関わらず軟調地合いが続いていることから、FOMCで利上げ決定後はドル売りが強まると思われる。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1900 ~ 1.2400
EUR/JPY 128.00 ~ 136.00

国際為替部 為替営業第二チーム 鶴田 涼平

先月の為替相場

2月のユーロ相場は上下往って来いとなるも月末にかけて下落する展開。第1週、1日のユーロ/ドルは1.24台前半でオープン。米ISM製造業景気指数の構成項目の内、雇用が前回から大きく低下するとドルが売られ1.25台前半まで上昇。2日、良好な米1月雇用統計を背景に米金利が上昇し、全般的にドルが買われる中で一時1.24台前半まで下落。

第2週、週初5日、ユーロ圏12月小売売上高が市場予想を下回った一方で米1月ISM非製造業景況指数が良好な内容となったことで1.23台後半まで軟化。6日、前日の米株急落ショックを背景にユーロ/円が下落するとユーロ/ドルも連れ安となり1.23台前半まで下落し、7日にかけても1.22台後半まで続落。8日、英金融政策決定会合が予想比タカ派となると対ユーロで債券買いが進行、ユーロ/ドルは1.22台前半まで続落。その後、プラートECB理事のタカ派発言を背景に1.22台後半まで反発するも、9日に米格付け機関から米債に対してネガティブな見解が示されるとユーロ/円が下落し、ユーロ/ドルは連れ安となり月間最安値となる1.2206まで下落。

第3週、週初12日、クロス円がじり高となる中でユーロ/ドルも1.23台ちょうど付近まで上昇。13日、ドラギECB総裁から欧州は不況から脱したとの見方が示されると1.23台半ばまで続伸。14日、米1月消費者物価指数(CPI)が市場予想を上回ると米金利が急騰し一時1.22台後半まで急落するも、その後すぐにドル全面安の展開に1.24台半ばまで急反発し、翌15日にかけても1.25付近まで続伸。16日、ドル/円が年初来安値を更新するドル売り地合いにユーロ/ドルは年初来高値となる1.2556まで上昇。

第4週、週初19日、中華圏や米国が休日となる中で方向感乏しく上値の重い展開。20日、独2月ZEW景気期待指数が市場予想を下回るとユーロ売り優勢地合いとなり、1.23台前半まで軟化。21日、FOMC議事要旨がタカ派な内容となるとドル買い優勢となり1.22台後半まで続落。22日、ECB政策理事会議事要旨にて数人のメンバーが緩和バイアスの変更を望んでいることが明らかになると、ユーロ買いが強まり1.23台半ばまで反発し、翌23日にかけても横這い推移となった。

第5週、材料不足となる中で26日から27日にかけては1.23台ちょうど付近で横ばい推移。27日、パウエルFRB議長による議会証言がタカ派寄りとなるとドル買い優勢地合いとなり28日かけて1.21台後半まで下落する展開となった。

今月の見通し

今月のユーロ相場は上値の重い展開を予想する。

タカ派寄りな12月会合議事要旨が公表されて以来、ユーロ相場は堅調推移が続き先月は早くも年初来高値を更新。今月は8日(木)にECB政策理事会を予定しており、政策ガイダンスの修正が意識される展開は必須。その他、4日(日)にはイタリア総選挙と独大連立を巡って社会民主党(SPD)員投票を予定しておりこちらも注目。これら注目イベントを基本的に無難通過する中で今月のユーロ相場は上値の重い展開をメインシナリオと予想する。

4日(日)に投票予定のイタリア総選挙。ポピュリズム政党の五つ星運動が支持率を伸ばす中、ベルルスコーニ元首相所属の右派連合とレンツィ前首相所属の左派連合の支持率も拮抗しており、三つ巴の状況。基本的に五つ星運動の政権入り回避が予想される中で過度にリスク視する動きは少ないものの、政権発足に時間がかかれば混乱は必須。世論調査で支持率トップの右派連合も連立政権の構成によっては反ユーロ懸念が高まる可能性もある。最悪のシナリオは回避されそうだが、依然として政治不安は残りそうだ。

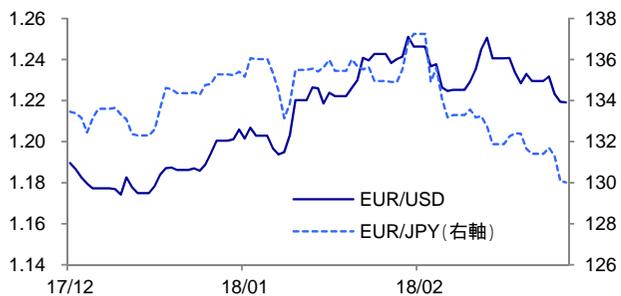
ドイツ連立協議を巡っては、SPDにて大連立是非を問う党员投票が行われる予定。ポピュリズム政党の「ドイツのための選択肢(AfD)」の政権入り回避するには大連立再発足が必須。世論調査からすると賛成多数となる見通しとなっており市場も既に織り込み済みであることを勘案すると、サプライズとなった場合の下落リスクだけが残っている状況。

今月最も注目が集まるであろうECB政策理事会では、量的緩和バイアスに関するガイダンス修正の有無が焦点。足許で早期修正期待に熱を帯びる中で3月会合での修正期待も高まっていたが、個人的には引き続きガイダンスの修正は時期尚早との見解が示されると考えている。足許で急速に進んだユーロ高に懸念を抱くメンバーも多く、先日ドラギECB総裁からはインフレ見直しに対する自信を深める一方で粘り強い金融緩和が必要との見解が示されており、引き続きの慎重姿勢が伺えた。インフレ上昇に加速感も感じられない状況下、正常化を急ぐ必要もなく基本的には特段のガイダンス修正等なく無難な内容になるのではないかと予想する。

上記イベントの無難通過を予想する中で特段のユーロ買い材料は見当たらず、ユーロ相場が一方的に下落する展開は考えづらいが基本的には上値の重い推移を予想する。

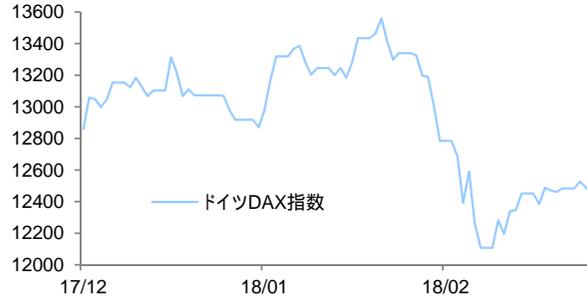
為替の動き

(資料) ブルームバーク



株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	ユーロ圏製造業PMI	1月	59.6	59.6	60.6
2/6	ユーロ圏小売売上高(前月比)	1月	-1.0%	-1.1%	-2.0%
2/7	独鉱工業生産(前月比)	12月	-0.7%	-0.6%	3.1%
2/20	独ZEW景況指数(期待)	2月	16.0	17.8	20.4
2/22	独IFO現況指数	2月	127.0	126.3	127.8
2/23	ユーロ圏CPI(前月比)	1月	-0.9%	-0.9%	0.4%
2/27	ユーロ圏消費者信頼感	2月	0.1	0.1	0.1
2/27	独CPI(前月比)	2月	0.5%	0.5%	-0.7%

(資料) ブルームバーク

カスタマディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

ユーロ・ブル (3名、1.2100~1.2600、中心1.2100~1.2600)

藤巻	1.2100 ~ 1.2600	景気は依然として堅調。そしてグローバルにインフレ懸念が意識されつつある中、欧州中銀はタカ派に動く可能性もある。よって、落ち着いたところでは再度買いフローが入ってくるのではないかと考えている。
西谷	1.2100 ~ 1.2600	月初にイタリア総選挙、独SPD党員投票などリスク要因が煽るが、イベント通過後はユーロ買いの流れを予想する。フォワードガイダンスの変更に絡むECB正常化に向けた期待感は依然として強く、中期的なユーロブルの目線を継続して臨みたい。
森谷	1.2100 ~ 1.2600	政治リスクへの意識からユーロの上値が押さえられる局面は想定される。もっとも、3月ECB理事会においてはフォワードガイダンスの修正がない可能性も想定されるが、正常化に向けて着実に進んでいる状況には変わりはなく、今月は再びユーロ買い優勢に転じる展開を予想する。

ユーロ・ベア (8名、1.1800~1.2500、中心1.2000~1.2400)

田内	1.2000 ~ 1.2400	ECB理事会議事要旨にて一部のメンバーが緩和バイアスの変更を望んだものの、フォワードガイダンスの調整は時期尚早と判断される等、ECBの出口戦略の不透明感や欧州の政局混迷懸念は根強い。ドル高修正局面継続との見方に変わりはないものの、積極的に買い進めるには材料不足と見る。
加藤	1.1800 ~ 1.2400	ECBはユーロ高を忌避しておりAPPの廃止は難しいと考える。テクニカルには1.2200レベルを割り込むと次のターゲットとして1.1800辺りが浮上してくる。
山下	1.2000 ~ 1.2400	欧州連合でユーロを導入していない国々のタカ化が目立ってきており、利上げ時期が後ずれとの見方も高まってきているECBとの対比から、ユーロ安・欧州通貨高の流れが強まるものとする。
矢野	1.2000 ~ 1.2400	物価上昇のスピードが緩やかであること、またドラギ総裁の発言からも読み取れるように、金融正常化(利上げ)には相応の時間が掛かりそう。当面はドルの軟調地合いから下値も限定的かもしれないが、上昇基調となるには材料不足。上値の重い展開を予想する。
佐藤	1.2000 ~ 1.2500	ECBによる拡大資産購入プログラム終了に対する期待は概ね織り込み済み。9月に期日を迎える同プログラムの延長について3月中に決定することはなく、終了期待が一段と高まることは考えにくい。米国サイドの要因に振られる時間帯が長くなりそうで、ユーロは上値の重い展開を予想したい。
岡本	1.2000 ~ 1.2400	リスクオフの流れから1.22台半ばまで調整が進んだユーロだが、再度ユーロ買いが広がるには手掛かり不足か。3月ECB理事会でフォワードガイダンスの変更が議論される予定も、実際に変更されなければユーロ買いの勢いは持続せず上値が重い。
鶴田	1.1900 ~ 1.2400	月初に予定しているイタリア総選挙では、5つ星運動の政権入りは回避される模様だが、過半数議席に達する政党がない中で政治的混乱は必須。ガイダンス修正が期待されるECB理事会も無難通過になると考えており、基本的には上値の重い相場展開を予想する。
大熊	1.2000 ~ 1.2400	ドイツの大連立合意やイタリア総選挙等、政局不安が煽っていることに加えて、ECBはフォワードガイダンスの文言の見直しは時期尚早としている。市場が期待している金融正常化はまだ遠いと思われ、ユーロは上値の重い展開を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.3600 ~ 1.4800
GBP/JPY 147.00 ~ 155.00

欧州資金部 山本 泰平

先月の為替相場

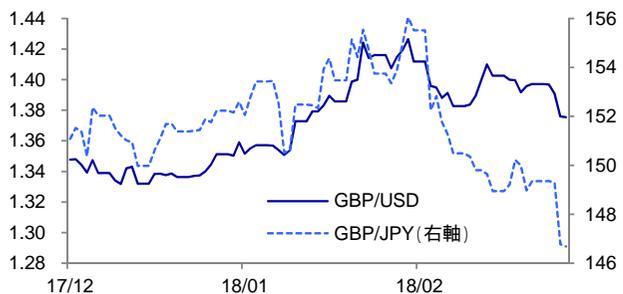
2月のポンドドルは1.4190でスタートし、英金融政策の正常化期待等を背景に買われる場面もあったが、英経済指標がさえず、英EU離脱交渉に進捗が見られない中、上値は抑えられた。月初は、英中銀総裁の「英経済のスタックは既に取り除かれ、伝統的な金融政策へ移行した」との発言が意識され、月中高値となる1.4279まで上昇。ロンドンの金融街シティが、EU離脱後の金融サービスにおける自由取引協定を欧州委員会に提案するも、全面的に否定(EU関係者)されたことが伝わると、反落。「パスポート権」を巡っては、ハモンド財務相が金融サービスで互いを認め合うシステムの支持を表明すると英紙から伝わったが、同日中にバルニエ首席交渉官から、特別な取計りは無いと念押しされた。デービス英EU離脱担当も、関税同盟に加盟しない方針を強調し1.3838まで下落。格付会社からは、無秩序なEU離脱は英国の格下げにつながるとの懸念が示された。8日の英中銀金融政策委員会(MPC)の政策決定発表、経済見通し公表、同総裁の記者会見が重なるスーパーサズデーでは、政策金利と国債買入れ枠を現行水準に据え置くことを決定する一方で、経済成長見通しを引き上げ、より早期かつ一段の利上げが必要になるとの認識が表明された。向こう3カ月の利上げ確率が7割超に上昇し、ポンドは対ドルで1.4145まで買い戻された。月中盤はメイ内閣が通商関係で英国が望む目標について閣内合意を目指したが、進展は無かった。メイ首相は在英日本企業幹部らと面談し、離脱後も関税等の障壁がない関係を確保するとし、投資継続を呼びかけたが説得力は乏しかった。14日、ジョンソン英外相が演説し、単一市場などEU規制と決別し主権回復を目指すべきだとの強硬スタンスを改めて強調。閣内対立が鮮明化しただけで、失望を誘った。16日に発表された、英1月小売売上高指数では、物価上昇を背景に食品の売り上げ(販売量ベース)は昨年10月以来の大幅な落ち込みとなったことで、前年比+1.6%と、予想(+2.6%)を大幅に下回った。さらに英系大手銀行決算(20日)で利益が予想レンジの下限を下回り、21日に発表された英10~12月失業率が予想外の悪化を示すと、1.3858まで下落。22日には、EU離脱協議に臨む立場を巡って主要閣僚協議がようやく実現し、カナダ型自由貿易協定をベースに一段の特別措置の獲得を目指すことを閣内合意したことが伝わった。主要閣僚の単一市場脱退論に歯止めがかかったことは好感できたが、EU側からこの構想は「えり好みであり、受け入れられるとは思わない」(EU当局者)、「理解できない」(EU外交官)等、早くも隔たりが示唆され、相場の反応は限定された。

今月の見通し

今年に入ってからのポンド高は、英政治経済を好感しての買いでは無く、ドル安が主因と考えるべきだろう。頼みの米株がさえず、ドルが下落トレンドを抜けない限り、ポンドドルは緩やかな上昇が継続すると思料。英EU離脱交渉を巡っては、2月は1月の融和路線と打って変わり、EUの態度が硬化。英国も強硬派の閣僚が応じ、ハードブレグジットを主張したことが顕著であった。欧州委員会(バルニエ首席交渉官)からは、ノルウェー、スイス型通商モデルの「扉を閉ざしている」、移行期間の方針に「相当な不一致」がある、英国の要求に対し「理解できない」「驚いている」、標準的な自由貿易協定ですら承認を拒む可能性もある等、語気の強い発言が目立ち、英国側からも、穏健派のハモンド英財務相を除く、殆どの主要閣僚が強硬路線を主張する等、建設的な議論がほとんど進まなかった様子が窺い知れた。にも関わらず、ポンドの下げ幅は思いのほか、限定的だった。もはや、英EU離脱を巡る思惑は、市場の関心を失っていると整理すべきだろう。離脱に必要なプロセス(欧州議会審議、同意手続き、EU27カ国審議、欧州理事会での承認)から逆算し、欧州委員が設定した交渉期限2018年10月末は、直ぐそこまで来ている。欧州議会(フォルホフスタット欧州議会交渉担当者)も、「離脱までに通商協議を完了させることはしない。将来像を提示する程度に留まる。」と明言したことから、実現可能な到達点が容易に想像できる。斯かる中、英EU離脱を巡る報道がポンドに影響を与えるとは考えづらい。3月、EUとの正式な通商協議に入る前に、英政府は交渉方針詳細を公表するとみられるが、反応は限定されそう。先月は、欧州議会から英EU連合協定が示唆されたが、前例(EU・ウクライナ)を吟味すると、譲許表に沿って関税を一時的に削減、撤廃する煩雑なもので、他のWTO加盟国より優遇されるが、ノルウェー、スイス、トルコ型と比べると遥かに劣後するものとの印象が強い。この決議案が示されても、ポジティブサプライズは無いだろう。単一市場参加から後退したと受け止められる可能性すらある。サプライズがあるとすれば、メイ英首相が退陣だが、可能性は相応にあるかもしれない。先月、メイ氏は任期満了の2022年まで首相を続投すると明言したが、保守党下院48人が同意すれば実施できる信任投票に向け、すでに40人が集まっており、通商協議を前に首相交代という偶発的リスクもある。ブックメーカーでは、英EU離脱時に、メイ氏が首相職にあるか、殆ど五分五分で取引されている。

為替の動き

(資料) ブルームバーク



株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	製造業PMI	1月	56.5	55.3	56.2
2/2	建設業PMI	1月	52.0	50.2	52.2
2/5	サービス業PMI	1月	54.1	53.0	54.2
2/9	鉱工業生産(前年比)	12月	0.3%	0.0%	2.6%
2/9	製造業生産(前年比)	12月	1.2%	1.4%	3.8%
2/13	消費者物価指数(前年比)	1月	2.9%	3.0%	3.0%
2/16	小売売上高(含自動車/前年比)	1月	2.5%	1.6%	1.5%
2/21	ILO失業率	10-12月	4.3%	4.4%	4.3%

(資料) ブルームバーク

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7600 ~ 0.7900
AUD/JPY 81.00 ~ 85.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 山口 美紀

先月の為替相場

2月の豪ドルは下落。

1日、豪ドルは0.80半ばでスタート。米長期債利回り上昇によるドル買いから一時0.80割れに下落。翌日、米1月雇用統計の非農業部門雇用者数が前月比20万人増加(予想18万人増加)、失業率は前月横ばいの4.1%、更に賃金上昇率は前年同月比2.9%と2009年6月以来の高水準となり、米長期債利回り上昇。一方、米国の利上げ期待が高まり、米株急落。リスクオフの動きが高まり、豪ドルは0.79前半に急落。翌週5日、米株が大幅続落となり、リスク回避が続き、豪ドルは0.79割れに下落。翌日、豪12月貿易収支は予想を大幅に下回る赤字、更に豪12月小売売上高(前月比)も0.5%減少と予想0.2%減少を大幅に下回り、豪ドルは0.78前半まで下落。同日の豪準備銀行(RBA)理事会では、政策金利が16会合連続で史上最低の1.5%に据え置かれた。RBA声明文も昨年12月内容から目立った変更無く、豪ドルは0.78台での横ばい推移。8日、ロウRBA総裁が講演にて利上げを急がない旨を示した。更に、NYダウが前日比1000ドル超下げ、リスクオフの動きが再び再開し、豪ドルは0.7759まで下落。

12日、前週の米株下落が落ち着き始めると、金融市場にも安心感が広がり、リスク通貨の豪ドルも約1か月半ぶり安値から0.78台に反発。14日、米1月消費者物価指数(前月比)は前月比+0.5%上昇と市場予想+0.3%上昇を上回り、豪ドルは一時0.78半ばから100pips急落。しかし、その後発表された米1月小売売上高が予想外に前月比▲0.3%減少となり、豪ドルはすぐに元の水準0.78台に反発。翌日、豪1月雇用統計はほぼ予想通りの結果となり、豪ドルは0.79近辺を挟んで揉み合い推移。その後、豪ドルは0.79台で横ばい推移。

20日、RBA議事録は新規材料に欠けるも、豪ドルは0.78後半に小幅下落。22日、タカ派(金融引き締め積極派)の米FOMC議事録を受けて、豪ドルは再び0.78前半に下落。翌日のFRB金融政策報告書、それを基にした27日のパウエルFRB議長の見解証言もタカ派な内容が続き、豪ドルは0.77後半に下落して、越月した。

今月の見通し

3月の豪ドルは上値の重い展開を予想する。3月FOMC(20~21日)での金利見直し、特に中立金利見直し変更の有無に注目。

先月発表された米FOMC議事録では、「さらなる」漸次式な利上げが正当化されると強調されたことが話題となった。加えて、雇用、家計消費、設備投資などに関する評価が上方修正され、物価に関してもインフレ期待が上方修正されるなど全体的にタカ派色の強い内容だった。この議事録を受けて、利上げ見直しを年3回から4回へ引き上げる向きも出始めた。米10年債利回りも2.95%と突破し、約4年ぶりの高水準を付け、次回FOMC(3月20~21日)に提示される金利見直し(ドットチャート)や中立金利見直し引き上げられる可能性が高いと見る。今月は米債利回り上昇や米ドル買いが出やすい環境と考える。

他方、RBAは先月9日発表した四半期金融政策報告で、失業率が従来予想よりもやや速いペースで低下すると見通しを示した。ただ、基調的インフレ率が2019年半ばまでに目標である2~3%の下限に達するとは引き続き見込んでおらず、利上げはまだ当分行われぬことを強く示唆した。RBAは失業率が2018年半ばに5.25%へ低下し、2020年まで同水準にとどまると予想。11月の報告では2019年半ばまで5.5%にとどまるとみている。国内総生産(GDP)伸び率見直しは、11月報告からほぼ変わらず。基調的インフレ率については2020年半ばまでは2.25%に到達しないと予測している。

テクニカル的には、2月の豪ドルは200日長期移動平均線を下回り、やや下向きの圧力がかりやすい。加えて、月次一目均衡表では、豪ドルは1月に約33年ぶりに雲(抵抗帯)に突入したが、再び雲下限近辺まで押し戻された。3月の豪ドルは、雲の中または雲下限(0.7750近辺)をしっかりとブレイクするか注視したい。

以上のことから、3月の豪ドルは上値の重い展開を予想する。また、3月の豪州重要経済指標は、1日:豪10~12月期民間設備投資、5日:1月住宅建設許可件数、6日:豪1月小売売上高、RBA理事会、7日:豪10~12月期GDP、8日:豪1月貿易収支、13日:豪1月住宅ローン承認件数、20日:RBA議事録、22日:豪2月雇用者数指数と見る。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

日本の約21倍の広大な国土を有するオーストラリアは、気候は都市によって異なりますが、概ね温帯(または熱帯)となりますので、冬季オリンピックよりも、夏季オリンピックの方が盛り上がりやすい。しかし、今年のピョンチャン冬季オリンピックでは、事前予想より視聴者数が約2倍に伸びており、スポーツ大国オーストラリアでも冬季オリンピックの関心が高まっているように思えます。ただし、日本のテレビに比べて、スキーやスノボのハーフパイプ等の放映が多く、フィギュアスケートの演技系の放映はやや少ないように感じました。同時期にBowl a Rama@ボンダイビーチというクールなスケートボード大会も盛り上がりを見せているように見えました。

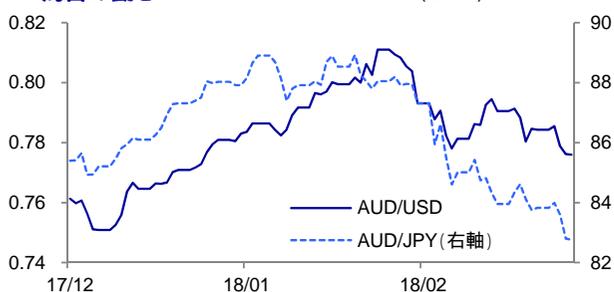
今回のオリンピックでは、オーストラリアは金:0、銀:2個、銅:1個と合計3個のメダルを獲得しました。惜しくも金は無かったですが、オーストラリアで有名な(皆の記憶に残る)ステイブ・ブラッドバリーの金メダルの話を簡単に紹介します。2002年ソルトレークシティオリンピックの男子・ショートトラックスピードスケート1000mにおいて、準々決勝から決勝まで、ライバル選手の転倒により勝ち抜き、優勝。優勝後のインタビューでも、自分は一番速い選手ではなかったと認めています。オリンピック至上最高のラッキーボーイとなりました。

また、当地では2000年のシドニーオリンピックでのシンデレラストーリーが有名です。シドニーのスリップ・インというバブでデンマークのフレデリック皇太子とタスマニア出身の一般人(ドナルドソン・マアリー)は知り合い、4年後に結婚。オーストラリア人として初めて欧州王室の一員となりました。

最後に、4月4~15日にゴールドコーストでコモンウェルスゲームズ(コモンウェルス諸国・諸地域参加の4年に1度のスポーツ大会)が開催されます。幸運求め、ゴールドコーストに飛ぶのもありですね!

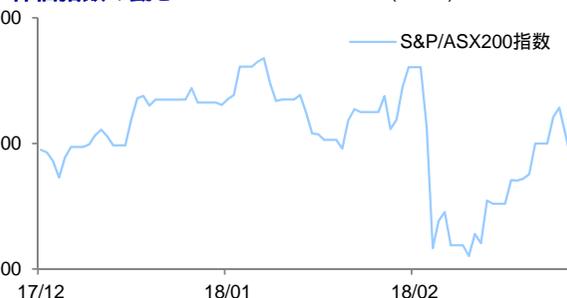
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	住宅許可件数(前月比)	12月	-7.6%	-20.0%	12.6%
2/2	生産者物価指数(前期比)	10-12月	-	0.6%	0.2%
2/6	貿易収支	12月	A\$200M	-A\$1358M	A\$36M
2/6	小売売上高(前月比)	12月	-0.2%	-0.5%	1.3%
2/6	RBA政策金利		1.5%	1.5%	1.5%
2/9	住宅ローン承認件数(前月比)	12月	-1.0%	-2.3%	1.6%
2/15	雇用者数変化	1月	15.0千人	16.0千人	33.5千人
2/15	失業率	1月	5.5%	5.5%	5.6%
2/20	RBA議事録				

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2250 ~ 1.2900
CAD/JPY 83.25 ~ 89.45

グローバルマーケット業務部 カナダ室 那須 絢子

先月の為替相場

2月USD/CADは1.2256でオープン。

2月の重要経済指標は2日の米国1月雇用統計でスタート。米国1月非農業部門雇用者変化数では、予想の+18万人増を上回る+20万人の増加が見られ好調、特に平均時給に関しては前年比で+2.9%増と予想の同+2.6%を大きく上回り注目を集めた。この日、米1月雇用が非常に強い結果となったために利上げ加速の見通しが頭頭、同時に米長期金利が急騰し、この日のNYダウ平均は665ドルと約9年ぶりの下げ幅を記録することとなった。発表と同時にUSD/CADは1.3%急上昇、この日は1.24台前半までドル高が進行した。

週明けの5日、米国株の下落が更に進行、この日NYダウ平均は1175ドル安と史上最大の下げ幅を記録した。リスク回避モードの市場では、USDドルが円を除いた主要通貨に対し買われ、USD/CADは1.25台半ばへと上昇。2017年の年末から続いていたUSDドル安に一服感が見られた。

9日発表のカナダ1月雇用統計は▲8.8万人減と予想の+1万人増を大きく下回る結果となった。しかしこれは1月に施行されたオンタリオ州の最低賃金大幅上昇の影響が関係していると考えられ、減少はパートタイム雇用に限定(▲13.7万人減)、一方で正規雇用は+4.9万人の増加が確認された。平均賃金は前年比3.3%(前回+2.9%)の上昇となり2015年以来の上昇率を記録。1月の失業率は前回の5.8%からやや悪化し5.9%となったが、依然として6%以内に留めておりカナダ1月雇用は概ね堅調な結果となった。この日のUSD/CADは1月雇用の見出しに反応し、一時1.2685まで上昇するが、その後は落ち着きを見せオープンと変わらぬ1.260前後での終了となった。

14日の米1月消費者物価指数(CPI)の食品・エネルギーを除くコア指数は前月比、前年比共に予想を上回る好調な結果。発表後、USD/CADは1.2649まで上昇した。しかしインフレや金利の急伸リスク警戒感もあり上値は重く、また同時に発表された米1月小売売上高は軟調な結果であったためその日は1.2493まで下落しての終了となった。

連休明けの第4週前半のカナダドルは弱い12月卸売売上高、小売売上高の結果から売りが優勢となりUSD/CADは1.27台まで上昇するも、23日に発表されたカナダ1月消費者物価指数(CPI)が予想を上回る結果であったためカナダドルが買われ、この日USD/CADは1.2658で取引を終えた。

今月の見通し

落ち着きを戻し再び上昇してきた米国株、全体的に好調な経済データ、米1月FOMC議事要旨で見られたタカ派姿勢などから3月はややUSDドル高へ動くか。

23日発表のカナダ1月消費者物価指数(CPI)は前月比+0.7%(予想:同+0.4%)、前年比+1.7%(予想:同+1.4%)と共に予想を上回る結果となった。食品とエネルギーを除いたコアCPIは前年比で+1.8%と前回の同+1.9%からやや鈍化したか、それでもカナダ中銀の目標である2%に非常に近い数値であった。今回の結果がカナダ中銀の利上げに対する慎重な姿勢を変えることはない。事実カナダ経済には依然としてNAFTA協議、隣国アメリカの税制改革、1月より導入された新しい住宅ローンの規制が経済与える影響など不透明感が残る。さらに前日の22日に発表された12月小売売上高の結果は0.8%減と3か月ぶりに減少した。これは11月のブラックフライデーがより多くの消費者の中で浸透してきて、12月のホリデーショッピング売上高に影響しているせいであり、決してカナダ消費者の購入活動が減少しているというわけではない。しかし今回の予想を下回る結果から2018年度の個人消費の伸びが、昨年度に比べより緩やかになることが考えられる。

先月に引き続きカナダ経済は2017年上半期の様な勢いは無いものの今も堅調な成長を見せている。カナダドルを支える原油(WTI)も1バレル60ドル前後で安定しており、今後もカナダ経済は緩やかな経済成長が期待される。しかし上記に述べたように不安要素が取り巻く状況でもあるために、今後の米国の動き、NAFTA交渉の行く末には目が離せない。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

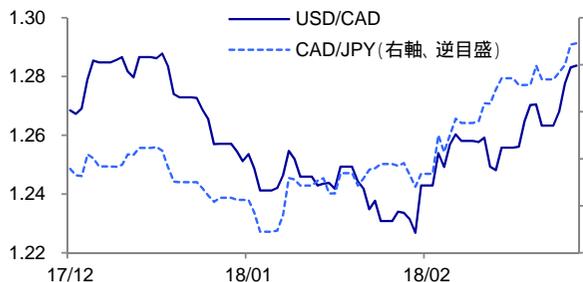
冬が長く厳しいカナダ、当然その中で育った多くのカナダ人はウィンタースポーツが大得意です。国技もアイスホッケーって言うくらいですから。

そんなカナダは冬のオリンピックではとてつもない威力を発揮します。今回の平昌オリンピックでは合計29個のメダルを取得し、メダルランキングではノルウェー、ドイツに続き3位と快挙を成し遂げました。今回のオリンピックでは、カナダが当然取るだろうと期待されていたホッケーやカーリングでの金メダルが少なく、予想外にがっかりする場面が多少ありました。特に女子ホッケーではファイナルでライバルの米国に敗北、2002年のソルトレイクシティ以来の連続優勝に終止符を打つこととなりました。しかし一方で新種目のビッグエア(スノーボード)、やカーリング混合ダブルスでの金メダル獲得やフィギュアスケートの合計4メダルなど他の種目での活躍が目立ち、今回の素晴らしい結果をけん引しました。私はアイスダンスで金メダルを取ったバーチャー&モイア組のバンクーバーオリンピック以来のファンで今回は開催地韓国とかなり時差があるなか夜更かししながら応援しました。身体的能力も然る事ながら彼らの表現力はとても素晴らしく、競技というよりは芸術的パフォーマンスで、フィギュアスケートという競技自体特に興味のない人でも楽しめると思います。

2020年は夏のオリンピックin東京ですが、カナダは暖かい季節が一年間に2か月くらいしかないのので夏のスポーツでは他の国に比べてびっくりするくらい弱いです。メダルの可能性があるのは陸上競技とカヌーぐらいか…。カナダ人もそれをよく分かっているのか、夏季オリンピックは冬に比べて全然盛り上がりません。しかしそれ以前に夏の暖かい気候はカナダでは非常に貴重なのでそんな時期に家に籠もってTVでオリンピックを見るのはナンセンス！なのかもしれないですね。

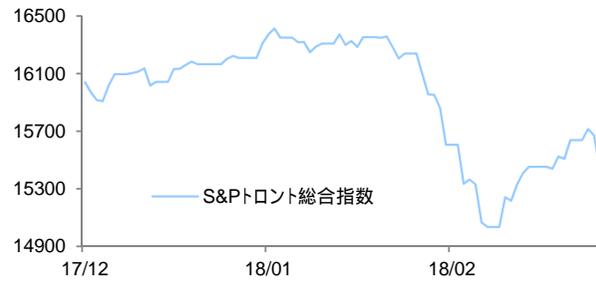
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/9	雇用ネット変化率	1月	1万人	-8.8万人	7.86万
2/9	失業率	1月	5.8%	5.9%	5.7%
2/16	製造業売上高(前月比)	12月	0.3%	-0.3%	3.4%
2/20	卸売売上高	12月	0.4%	-0.5%	0.7%
2/22	小売売上高(前月比)	12月	-0.1%	-0.8%	0.2%
2/23	消費者物価指数(前月比)	1月	0.5%	0.7%	-0.4%
2/23	消費者物価指数コア(前年比)	1月	1.7%	1.8%	1.9%
3/1	経常収支	4Q	-\$17.5b		-\$19.4b
3/2	GDP 四半期	4Q	2.0%		1.70%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1060	~	1110	(注)100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	9.60	~	10.10	
	JPY/KRW	9.90	~	10.42	

ソウル資金室 下山 泰典

先月の為替相場

先月のドル/ウォン相場は概ね1060台後半~1100を上下する展開。月前半は、米国発のリスクオフムードに左右される値動きとなった。月初は1068.50でオープン。月初から米株安が継続する中、5日の大規模な下落を受けてNDF市場でKRW売りとなり、6日のオンショア市場では月高値となる1098.60まで上昇。その後は一旦戻すも8日に再び米株が急落すると9日のオンショア時間には1098.00までKRW売りが進んだ。それでも、月中旬には一旦持ち直し。市場が徐々に落ち着きを取り戻し、かつ韓国の旧正月前で実需のKRW買い等も入ったことで、旧正月前の最終営業日である14日には1070ウォン台まで上げ幅を戻す展開となった。その後も市場でリスクセンチメントが回復する中、NDF市場では16日にかけてウォン買いが継続。旧正月明けの19日にはドル/ウォンの今月の安値となる1066.40までウォン買いが進んだ。しかし、1060レベルはサポートレベルとして意識されやすいことや、ドルインデックスの上昇に見られるとおりグローバルにドル買いが進んだこと(21日に公表されたFOMC議事要旨がタカ派的であったことなども背景だろう)などにより、ドル/ウォン相場は22日に1085.10まで反発。その後は一旦緩むも、27日海外時間、注目されていたパウエルFRB新議長の会見がタカ派的と捉えられたためドルが騰勢を強め、28日のオンショア市場では1084.00まで値を戻し、1082.80でクローズ。なお、27日のBOKの金融通貨委員会では、市場の予想どおりに金融政策の据置きが決定された。李総裁の会見では、韓国の金融政策が米国の金融政策に基づいて自動的に決定されることはない、たとえ米国の金利が韓国の金利を上回るペースで上昇しても目先で海外資本が流出するとは思わないなどの発言が見られたが、同会合が李総裁の任期中最後の会合であり、市場へのインパクトは限定的だった印象だ。

今月の見通し

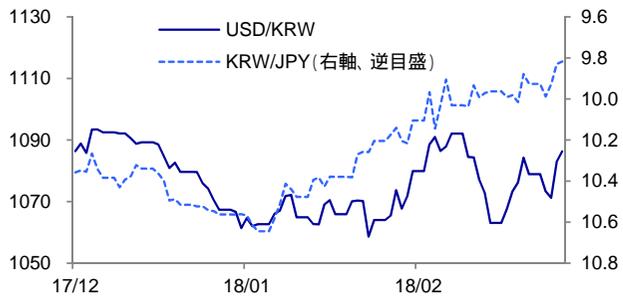
今月のドル/ウォン相場はやや上昇する展開を予想する。今月を見通す上では下旬にある米FOMCや、韓国での平昌五輪・パラリンピック閉会後の地政学的リスクの行方、また2月の米株急落を目の当たりにしたうえでいわゆる「ゴルドイロックス経済」の崩壊懸念など、ウォンにとっては分が悪い材料が多い印象だ。まずは20-21日に予定されている米FOMC。市場ではほぼ100%の参加者が利上げを見込んでいる模様。利上げ自体は織り込み済みであるため市場へのインパクトはなさそうだが、問題はドットチャートで示される今後の利上げ見通し。今年の利上げ見込みが4回に修正されるのか、また長期見通しが上方修正されるのか、など。結果次第では現在顕著に上昇している米長期債利回りを一段と押し上げ、同時にドル買いを誘発する材料にもなりうるため、注意して臨みたい。続いて、地政学的リスクの行方。五輪期間中は韓国・北朝鮮による南北の融和ムードが演出されており、北朝鮮も目立った挑発行動などをしていない。しかし、五輪も終了した今、今後は米国を交えて不穏なムードが再燃する可能性が否定できない。米韓軍事演習の実施有無や文大統領の訪朝はあるのか、米朝間の対話は実現するのか、など、高度に政治的な問題が山積。北朝鮮の融和ムードは経済制裁が効果を発揮しているからとの論調もあるが、果たして。朝鮮半島を巡るリスクが再燃すればウォン売りは不可避と思われる。最後にいわゆる「ゴルドイロックス経済」の崩壊懸念の観点。2月の米株の急落は市場参加者の肝を冷やしたといえよう。物価が上昇しない中、これまでの各国中央銀行の金融緩和策を受けて市場に溢れる資金を背景に多くの資産が買われる状況であったが、株の史上最高値更新への警戒感や中央銀行の金融政策正常化路線などを受けて、これまでの前提が失われつつあるのも事実。先月のパウエルFRB新議長の議会証言でタカ派的な発言が聞かれたが、米利上げ観測の高まりによるドル買いに加えて、ゴルドイロックス経済が崩れるとなればリスクセンチメント悪化によるウォン売りに繋がると思われる。以上を勘案すれば、今月のドル/ウォンは基本的にはやや上昇する展開を予想したい。ただ無論、そもそも大幅な経常黒字を擁するウォンであり、また地政学的リスクの一段の改善やリスクセンチメントの堅調な維持などがあればウォン買いに容易に傾きうるとの観点は維持する必要がある。

今月のつづやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』
韓国で初となる冬季オリンピックが平昌で開催！このタイミングでソウルに駐在しているのも何かの縁と、足を運んだ。
室内競技を行う江陵会場と屋外競技を行う平昌会場があるが、今回はカーリングを見たかったため江陵へ。ソウル市内からKTX(新幹線)で2時間ほど。江陵駅につくと、至るところに装飾が施されオリンピック一色。駅から徒歩15分、道中、怪しい西欧人の露店で日本国旗の手旗を千円で購入するもオリンピックパークではまさかの手旗を無料配布(笑)両手に花ならぬ「両手に旗」、準備は万全だ。
まずは、男子カーリング。パワーのある投石はとてとても迫力があり、トリプルテイクアウトなどは圧巻。後の展開が全く読めず、ハラハラドキドキ感とともにカーリングの奥深さを肌で感じた。日本は世界ランキング1位のカナダを相手に粘りを見せるも4-8で負けてしまったが、隣レーンの韓国-スイス戦で、大接戦を韓国が制し会場は大興奮に包まれていた。
午後は、アイスホッケー男子のアメリカ対スロバキア戦。プレーの迫力はさることながら、アメリカの「U・S・A」コールが会場を埋め尽くす。韓国の駐留米軍の人たちも多くいたのだろうか。試合もアメリカが5-1でスロバキアを圧倒し、少しスロバキアに同情した。
夕方には、アイスホッケー女子の日本対スイス戦(5-6位決定戦)。予選でコリアに勝ちオリンピック初勝利を上げ、順位決定予備戦でスウェーデンに劇的勝利し5-6位決定戦に。スイスには惜敗したもの、ここまでの頑張りにお疲れ様、ありがとうと両手の旗を振った。
オリンピックの盛り上がりには韓国国内でも不安の声があったが、国内外から多くのファンや関係者が詰めかけ大盛り上がりであった。東京2020も必ず観戦したいと思いつながりながら帰路についた。(山崎)

為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	CPI(前年比)	1月	1.3%	1.0%	1.5%
2/1	CPIコア(前年比)	1月	1.5%	1.1%	1.5%
2/1	貿易収支	1月	\$4003M	\$3721M	\$5511M
2/5	経常収支	12月	-	\$4092.3M	\$7427.6M
2/14	失業率	1月	3.7%	3.6%	3.7%
2/27	BOK金融通貨委員会	-	1.50%	1.50%	1.50%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 29.00 ~ 29.50
TWD/JPY 3.55 ~ 3.75

台北資金室 三浦 勇二

先月の為替相場

2月のドル/台湾ドル相場は、ドル高台湾ドル安。

月初のドル/台湾ドルは、1月FOMCの声明文において、景気判断、物価判断がともに上方修正されたことや、「緩やかな利上げが正当化される」との文言がタカ派的と受け止められたことから、ドル買い台湾ドル売り優勢で推移し、2/2の米1月雇用統計の発表を前には29.242まで上昇。

米1月雇用統計は、平均時給が前年比+2.9%と、2009年6月以来の高い伸びとなったことを受けて、米金利上昇圧力への警戒感などから米株が大幅安となると、翌2/5の台湾市場では台湾株も大きく値を下げ、株式市場から外国人投資家の資金流出が増加。これを受け、ドル買い台湾ドル売りの流れが強まり、ドル/台湾ドルは29.4台へと上昇した。その後、リスク回避姿勢が一時的に和らぐ中、29.220まで反落するも、再びダウ平均が1,000ドル超の下落となったことから、29.4台を回復。2/9には2月の高値となる29.439をつける場面もみられた。その後は、株式市場が春節の休場に入る中、輸出企業の実需のドル売り取引が優勢となり、29.3台へ軟化して春節の連休入りとなった。

春節明けの2/21は、台湾株が2.8%を越す上昇をみせる中、株式市場への海外資金の流入も膨らみ、ドル売り台湾ドル買いが先行。一時29.145の安値をつける展開となった。その後、一時的に株が反落する場面では、ドル高方向へ振れるものの、外国人投資家の資金流入が続いたことや、ハーカー・フィラデルフィア連銀総裁やブラード・セントルイス連銀総裁のハト派的な発言を受けた米金利の低下からドル安となったこと、月末にかけては輸出企業の実需の取引も増えたことから、ドル/台湾ドルは上値の重い推移となった。

今月の見通し

3月のドル/台湾ドル相場は、台湾ドル高地合いの継続を見込む。

2月に発表された台湾の経済指標をみると、1月の輸出額が前年比+15.30%と16か月連続でのプラス成長を記録。2017年1月は春節で営業日数が少なく、比較対象の数値が小さかったことも影響しているが、スマートフォン向け電子部品や車載電子部品などの出荷が好調さを維持した。一方、春節の連休を控えて輸入が前年比+23.30%と大きく増加したことから、貿易収支は24.2億ドルの黒字と、前月の61.3億ドルから黒字額は大きく縮小した。また、1月の消費者物価指数は、前年比+0.88%と、前月の同+1.22%から物価の伸びが鈍化。石油製品価格や医療費が上昇した一方で、生鮮食品価格などが大きく低下した。

3月は引き続き、世界の株価動向や米国の金融政策の動向が注目される。

米1月雇用統計後のグローバルな株価の乱高下を受け、春節前にかけては、台湾株からの外国人投資家の資金が大きく流出。2/5-12の6営業日で1,000億台湾ドルを越す流出となった。しかしながら、春節後は、株式市場が落ち着きを取り戻したこともあり、流出は一服しており、3月に入っても海外資金の流入が続くようだと、再び台湾ドル高圧力が再燃しやすいか。

米国では、3/20-21にかけてFOMCの開催が予定されている。25bpのFF金利誘導目標の引き上げが決定されることについては、市場での織り込みがすでに進んでいる。焦点はFOMC後に公表されるFOMCメンバーの利上げ見通しであり、具体的には2018年の利上げが3回から4回に修正されるかどうかとなる。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

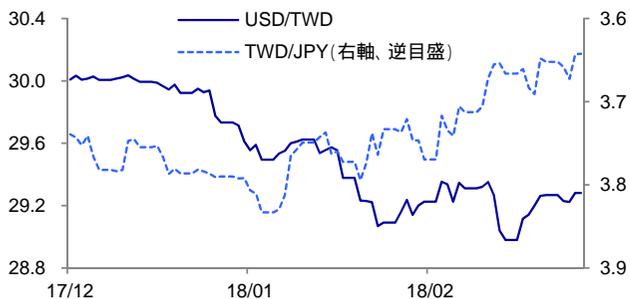
夏のイメージが強い台湾ですが、夏季オリンピックでは、野球やテコンドー、ウエイトリフティングなどの種目で、これまで21個のメダル獲得実績があります。直近のリオデジャネイロオリンピックでも、ウエイトリフティングで許淑淨選手が見事に金メダルを獲得しています。

一方、温暖な気候ということもあり、台湾ではウィンタースポーツはあまり盛んではありません。屋内スキー場、スケートリンクが台湾内に1つずつあるくらいで、そのためか、冬季オリンピックの注目度も日本と比べると高くありません。まだ冬季オリンピックでメダリストも輩出していないという状況でもあります。

なお、先日まで行われていた平昌オリンピックでは、台湾からスピードスケートに3選手、リュージュに1選手が参加していました。残念ながら初のメダル獲得とはなりませんでしたので、ぜひとも次回に期待したいものです。

為替の動き

(資料) ブルームバーク



株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/5	外貨準備高	1月	-	455.72B	451.50B
2/6	消費者物価指数(前年比)	1月	1.00%	0.88%	1.22%
2/7	輸出(前年比)	1月	18.10%	15.30%	14.80%
2/7	輸入(前年比)	1月	14.50%	23.30%	12.20%
2/7	貿易収支	1月	4.90B	2.42B	6.13B
2/13	GDP改定値(前年比)	Q4	3.30%	3.28%	3.28%
2/26	失業率	1月	-	3.68%	3.70%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8000 ~ 7.8300
HKD/JPY 13.35 ~ 13.90

香港資金部 Ken Cheung

先月の為替相場

【2月の香港ドル直物相場】

ドル/香港ドルは、旧正月期間を過ぎ総じて閑散な状況が継続する中で、7.8169水準から7.8273水準まで緩やかに香港ドル安が進行する展開となった。米金利と香港ドル金利の金利差が引き続き拡大している状況や、中国本土からの堅調な香港株への資金流入も相俟って緩やかな香港ドル安が継続した。ドル/香港ドルフォワードの1年物については、▲600ポイントと9月以来となる水準まで下落する展開となった。

【2月の香港ドル金利市場】

香港ドル市場の流動性状況は引き続き安定した状況が継続し、香港のHIBOR1か月物及び3か月物は0.7%付近及び1.1%付近まで低下した。斯かる中、FRBによる緩やかな利上げ継続見通しが残存し、米金利と香港ドル金利の金利差は1か月物及び3か月物で0.92%及び0.84%程度と約10年ぶりとなる水準まで拡大した。足許インターバンク市場の流動性を図る指標である香港金融管理局(HKMA)の当座預金残高は、為替基金短期証券の追加発行は示唆されておらず、約1800億香港ドルと前月とほぼ同水準で推移している一方、過度な金利差拡大に伴い同発行が再開される可能性は十分に秘めており注意が必要。中長期金利については、香港ドルスワップ金利の3年物は小幅な動くに留まっている。

【2月の香港株式市場】

ハンセン指数は、最高値である33,484水準から2月初旬の世界同時株安の流れを受けて一時29,129水準まで急落したものの、その後は中国本土からの根強い資金流入からじりじりと値を戻し、足許31,500水準程度まで回復している状況。旧正月期間を経て、今後取引量は徐々に活発化する見込み。

今月の見通し

【3月の香港ドル直物相場】

ドル/香港ドルの取引レンジは、7.800から7.830を想定する。FRBによる緩やかな利上げ見通しに大きな変化はない中で、米金利と香港ドル金利の金利差は引き続き拡大しており、米ドル買い香港ドル売りフローは根強く残存するだろう。足許HKMAからの為替基金短期証券の追加発行の動きは見られていないが、米ドル金利と香港ドル金利の金利差は相応に拡大しており、同発行の再開等より香港ドル高圧力が高まる展開も想定したい。一方、2月初旬の世界同時株安など、堅調な香港株市場が急落する等、市場ボラティリティが再び高まる局面となれば、一時的に相場が乱高下する可能性も見込まれ、要注意が必要。

【3月の香港ドル金利市場】

足許香港ドル金利は安定した推移となっている。一方で、米ドル金利との乖離幅が相応な水準に達しており、FRBによる緩やかな利上げが継続される見込みの中で、HKMAによる為替基金短期証券の追加発行の再開等を経て、短期ゾーンを中心に上昇基調に向かう展開を想定する。中長期ゾーンについても、足許の緩やかな動きから徐々に米ドル金利に追随する展開を想定する。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

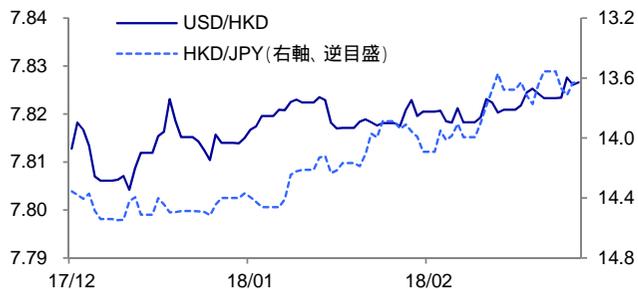
香港人にとってオリンピックと言えば、1996年のアトランタオリンピックにて香港出身の選手である LeeLaiShan選手がウィンドサーフィンで初めて金メダルを獲得したことを思い出すだろう。

その8年後の2004年アテネオリンピックにおいては、卓球で銀メダルを獲得し、2012年のロンドンオリンピックでは、自転車競技部門で銅メダルを獲得するなど、香港人におけるスポーツ熱は年々熾上りに高まっている。

日ごろからスポーツをする習慣が根強い香港にて、オリンピックに匹敵するイベントが香港セブンスである。国際ラグビー評議会が主催する7人制ラグビー大会のひとつで、24の国と地域からの出場チームから頂点を目指す国際的なスポーツイベント。2018年は4月に開催予定であるが、同期間は街中が仮装だらけになり、驚異的な熱狂の渦に包まれることになろう。

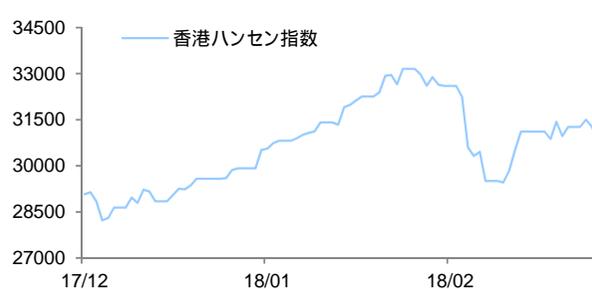
為替の動き

(資料) ブルームバーク



株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	小売売上高(価格、前年比)	12月	6.70%	5.80%	7.60%
2/1	小売売上高(数量、前年比)	12月	6.00%	4.30%	7.00%
2/5	日経香港PMI	1月	-	51.1	51.5
2/7	外貨準備高	1月	-	\$441.5b	\$431.4b
2/22	失業率(季調済)	1月	2.90%	2.90%	2.90%
2/22	CPIコンボジット(前年比)	1月	1.80%	1.70%	1.70%
2/27	輸出(前年比)	1月	16.10%	18.10%	6.00%
2/27	輸入(前年比)	1月	18.90%	23.80%	9.00%
2/27	貿易収支(HKD)	1月	-20.3b	-31.9b	-59.9b
2/28	財政収支(HKD)	1月	-	54.7b	53.4b

(資料) ブルームバーク

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.2000 ~ 6.6000
 CNY/JPY 15.91 ~ 18.23
 100JPY/CNY 5.5200 ~ 6.2900

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 馬場 一樹

先月の為替相場

【為替相場】

2月のドル/人民元相場は、月前半に2015年8月以来となる水準まで元高が進行するも、春節前後ではドル高人民元安が進行。グローバルな株価調整が進む中、月初のドル人民元は6.30近辺で上値の重い展開。その後、人民元買いのフローが強まる動きが入ったことから一時6.25近辺まで水準を切り下げたなど、2015年8月以来の水準までドル安人民元高が進行した。先月から続く元高の動きが引き続き強まると思われたが、春節期間間近になるとそれまでの元高ポジションを調整する動きが入ったとみられ、ドル人民元は6.35近辺までドル高人民元安が進行。円やユーロでドル安の動きが強まるなど海外市場でドル売りの動きが加速したにも関わらず、ドル人民元はドルの動きに追随しなかった。春節期間中には海外市場でドル高が進んでいたこともあり、ドル人民元は春節後もドル高人民元安の動きが強まる展開。ドル人民元は一時6.36超まで上昇したものの、その後再びユーロ安を背景にドルが弱含んだこともあり、6.30近辺まで調整して推移した。14日に中国人民銀行は2017年10-12月期の金融政策についての内容を取りまとめた「貨幣政策執行報告」を発表。「規律ある中立の」金融政策姿勢を示し、これまで通り金融の安定性を重視した。

【金利相場】

人民元金利は、当局による資金供給の見送りが続いていたが、中期貸出制度(MLF)や春節後に実施された資金供給オペ等を受けて潤沢な流動性は維持。春節前後でも全般的に落ち着いた地合となり、金利水準も概ね同水準での推移となった。

今月の見通し

【為替相場】

3月のドル/人民元相場は、全国人民代表大会(全人代、国会に相当)における当局の政策スタンスを見極める展開か。また、引き続き海外市場におけるドルの動きを注視。5日から全人代が開催される。本大会では政策運営と2018年の経済目標が決定される見込みであり、具体的なGDP目標、金融引き締め政策へのスタンス等が注目される。過剰投資・生産能力の削減、金融システムリスク防止に向けた債務圧縮等政策を強化していく姿勢が確認された場合は、為替については金融引き締め政策による中国経済成長鈍化懸念を背景とした人民元安方向への動きが想定される。海外市場のドルの動きにも左右されやすい状況下、欧州において高まる引き締め期待を背景としたユーロ高や、足元の円高への動きを受けたドル安の動きには警戒。8日にはECB政策理事会、21日にはFOMCとイベントも控えており、前後のドル相場の動きは注視したい。

【金利市場】

足元流動性が維持される中、春節後も引き続き足元の金利は落ち着いている状況。但し、当局による金融監督強化の動きやレバレッジ解消を企図した規制強化・引き締めへの警戒感根強く、中長期的な金利上昇圧力は継続するものと予想。

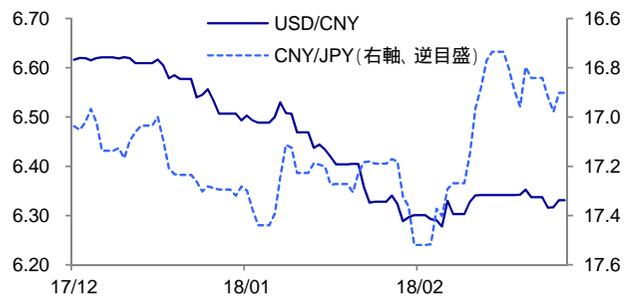
今月のつばやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

中国はスポーツ大国です。オリンピックでも様々な種目で金メダルを取っています。なぜこれほど良い成績を収めるのか。人口の多さもありますが、そもそも中国におけるオリンピック選手というのは、小さいころから専門的に訓練された人たち。日本のようにまずは学業をし、部活動やクラブ活動の中で才能のある人がなる、というプロセスではありません。「早期体育専門訓練」といいますが、6歳から10歳くらいまでに他の子より足が速い、身体が柔らかくバネがある等体育面で素質のある子は、普通の学業を止めて体育の専門的な科目に入ります。そうした子達のことを「少年**运动员**」といいますが、候補生として選ばれた子どもたちは、朝から晩まで身体の訓練をします。それだけではなく、筋肉をつける、身体を柔らかくする等、全般的な身体能力の向上を小さな頃から実施します。さらに、自分の限界を超えることなどの精神集中法も訓練されます。日本では学生時代までは親の教育費の中から生活していくこととなりますが、中国においてはこれらのオリンピック候補生の訓練は、国のお金でなされます。お金持ちの子ではなくとも、才能があり、努力を惜しまない子であれば、オリンピック選手になれるということです。だからこうして強い選手が生まれるということのようですね。

為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/8	貿易収支(RMB建)	1月	330.0B	135.8B	362.0B
2/8	輸出(RMB建)(前年比)	1月	2.6%	6.0%	7.4%
2/8	輸入(RMB建)(前年比)	1月	5.3%	30.2%	0.9%
2/9	CPI(前年比)	1月	1.5%	1.5%	1.8%
2/9	PPI(前年比)	1月	4.3%	4.3%	4.9%

(資料)ブルームバーグ

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3100 ~ 1.3350
SGD/JPY 80.00 ~ 82.00

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

先月の為替相場

2月のシンガポールドル(SGD)相場は、約3年ぶり高値圏で持ち合い。SGDは1月末に1.30台前半の約3年ぶり高値をつけていたが、米株式市場が史上最高値から反落したことでリスク回避ムードが広がり、SGDも月初は1.31台前半まで戻してオープン。2日発表の米1月雇用統計は非農業部門雇用者数が予想を上回る20万人の伸び、平均時給も+2.9%と8年半ぶりの大幅上昇となった。これを受けて米利上げペースが加速するとの思惑から、米ドル金利が大幅上昇する一方で、米国株は利益確定売りから急落。この流れの中で、SGDは2日に1.32近辺まで急落した。

翌週は米株式市場を眺めながらの推移。米国株は5日、売りが売りを呼ぶ展開となりダウ平均は過去最大の下げ幅を記録。週半ばに一旦反発したものの8日は再び急落し、9日に漸く下げが一服した。SGDもこの動きをなぞる様に、週前半は1.31台後半から1.32台前半で神経質に上下。週後半に入るとSGD売りが加速し、9日には1.33台前半まで続落したが、引けにかけては1.32台後半へ戻して越週した。

12日の週は米株式市場が持ち直し、リスク回避の一服でSGD反発の流れとなった。週初から連日上昇し、16日には1.30台後半の月間高値をつけたが、16日は旧正月でSGD勢が不在だったこともあり、投機筋の利食いから1.31台前半まで戻して引けた。

19日の週は、旧正月明けで参加者が少ない中、前週の反動でSGDが軟調推移し21日に1.32台前半まで反落したが、21日、22日の両日、複数のFRB高官から急速な利上げ期待の高まりを懸念する発言が相次いだことから同水準で下げ止まり、その後は月末にかけて1.32挟みの小動きが続いた。

今月の見通し

3月のシンガポールドル(SGD)相場は、新規材料難から方向感見出し難く、レンジ取引を予想。

1月のFOMCでは米国経済見通し、物価見通しとも上方修正され、FRBが利上げペースを加速するとの期待が広がったが、株式市場が不安定な動きとなったこともあり、2月下旬には急速な利上げ期待を牽制する発言がFRB関係者から相次いだ。為替、株、債券相場のいずれの急変も、FRBの金融政策運営に影響する可能性があり、今後は米経済指標に加え、各市場動向、当局関係者の発言への注目度が高まりそうだ。

昨年11月からほとんど戻りなく買われてきたSGD相場だが、2月には大幅な利食いが出た。今後はトレンドに乗って一方方向にポジションを積み上げるのではなく、小刻みな回転を効かせた運用となることが予想され、3月はレンジ取引となりそうだ。2月につけた2番天井の1.30台半ば近くではSGD売り興味も予想される一方で、4月のMAS通貨政策定例見直しに向けて、一部でSGD高誘導再開の思惑があることや、昨年末のクローズ水準である1.33台後半にかけては、買い遅れ筋による戻り待ちの買いが予想されることから、SGDの下値も限られそうだ。

注目材料は、欧州中銀理事会(8日)、米FOMC(20~21日)、シンガポールCPI(23日)。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

日本のメダルラッシュに盛り上がりを見せた平昌オリンピックではございましたが、雪の降らない(常夏の)当地において、冬季オリンピックの注目度は極めて低い状況です。また、開催時期が2月ということもあり、街中旧正月のお祝いムードでそちらへの関心が一層高いのも、冬季オリンピックが盛り上がらない一因かもしれません。

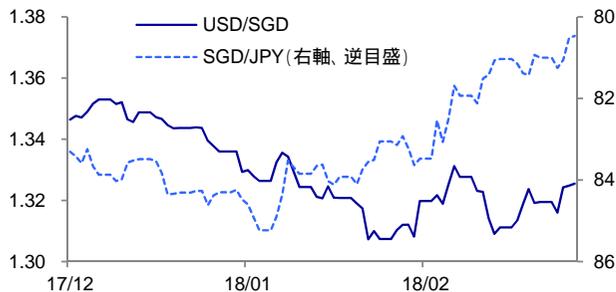
ために、若手ナショナルスタッフに聞いてみたところ、サマーオリンピックしか興味ないと予想通りの回答がございました。

調べてみると、今回の平昌オリンピック参加国は、史上最多の92カ国、初参加国が6カ国(シンガポール・マレーシア・ナイジェリア・コンゴ・エリトリア・エクアドル)あります。

ちなみに、シンガポールは、ショートトラック(Cheyenne Goh選手)で1名初参加となりました。オープニングセレモニーで、国旗を持ち1人で入場する姿は、当地ニュースでも報道されておりました。また、シンガポールには、主なスケートリンクは2カ所あり、内1つはオリンピックサイズ級の施設の様です。まさに、当地でもこれからウィンタースポーツ人口が増え、新たな歴史が刻まれていくことを楽しみにしております。(前川 真也)

為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/2	購買部景気指数	1月	52.6	53.1	52.8
2/2	電子産業指数	1月	-	52.9	53.2
2/12	小売売上高(前年比)	12月	4.7%	4.6%	5.0%
2/14	GDP(前年比)	4Q	2.9%	3.6%	3.1%
2/15	非石油輸出(前年比)	1月	8.9%	13.0%	3.1%
2/23	CPI(前年比)	1月	0.4%	0.0%	0.4%
2/26	鉱工業生産(前年比)	12月	8.0%	17.9%	-3.4%

(資料)ブルームバーグ

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 30.30 ~ 32.80
 THB/JPY 3.36 ~ 3.48

バンコック資金室 山崎 浩幸

先月の為替相場

●株式の乱高下で往って来いの展開
 上旬、ドルパーツは上昇。31.30台でスタート。タイ商務省が発表した1月CPIは、101.44(前年同月比+0.7%)と7ヶ月連続の上昇となり、翌2日にかけて米債利回りが上昇すると、ドルパーツも底堅く推移。ところが、米1月雇用統計が良好な結果であったため、一時31.50近辺まで上昇。翌週5日には、世界の株式市場が軒並み下落したことで、リスク回避的な動きが強まり、一時31.60付近まで上昇した。翌日もその動きが継続し、タイ株・債券売りから31.70付近まで押し上げるも、ダウ平均が大幅上昇に転じたことで31.50付近まで値を戻した。翌日、FED高官からのタカ派発言や、政府機関閉鎖を回避見込みと発表されたことでドル買いが進み、再び31.65付近へ上昇すると、翌日にかけてその流れが継続し、一時31.90付近まで上昇。しかし、9日にはSETやダウが上昇に転じたことで、リスクオンの動きが強まり、31.70付近まで下落した。中旬、ドルパーツは下落。翌週12日になると、外国人投資家のタイ国債売買状況で、11営業日ぶりに買い越しに転じ、31.60台前半で上値重く推移。その流れから翌日は31.40台後半まで下落。14日はタイ中央銀行の政策決定会合(MPC)が開催され、マーケット予想通り全会一致で政策金利1.50%の据置が決定され、一時31.50付近まで上昇するも、その後の米1月CPIで2.10%(予想1.90%)と予想対比良好な内容であったため、31.30付近まで下落。その後もじりじりと下落、一時2013年11月以来となる水準まで下落するも、その水準では底堅く推移した。翌日からは旧正月で、マーケット参加者が少ない中、31.20台での値動きが続いた。週が変わり19日にはタイ第4四半期のGDPが発表され4.0%(予想4.3%)と予想対比悪化したため、31.40近辺に上昇。下旬、ドルパーツは再び上昇。前日の影響でパーツ安の流れが継続、21日にタイ1月貿易収支(通関ベース)が▲119M\$(予想433M\$)と2ヶ月連続のマイナスとなったことでパーツ安が加速、翌日にかけて31.60付近まで断続的に上昇した。ところが、海外からの投資フローが安定的に流入していることからその水準ではパーツ買いとなり31.40台半ばまで急落。その後は上値の重い展開が続いた。週が変わって、月末の国際収支統計に期待が集まりパーツ高が進行、一時31.20台半ばに到達。27日にパウエルFRB議長の議会証言で、タカ派寄りの発言を行ったことでドル高が進行し、31.40台半ばへ値を戻した。28日、BOTからタイ国際収支統計が発表され、タイ1月経常収支は\$5,211M(予想\$4,400M)と予想を大幅に上回り、輸出・輸入も引き続き好調であることが確認されると、31.40付近へ値を下げた。

今月の見通し

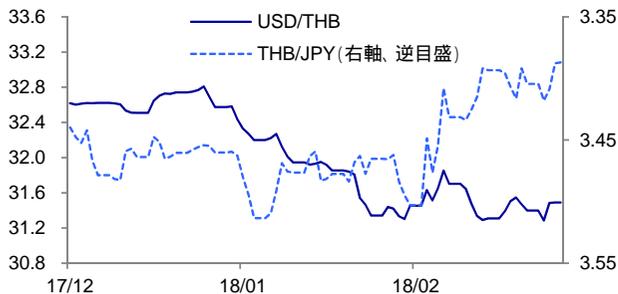
●引続きパーツ高の流れが継続か
 先月は、米債利回りの上昇・インフレ率上昇から世界同時株安となり、ドルパーツは31.20付近から31.90付近と非常に大きな値幅での値動きとなった。旧正月となったこともあり、マーケット参加者が長期休暇となるタイミングでポジション調整が行われたとの見方もあるかと思われるが、昨年から続くパーツ高の大きな波動には変化が無いものと考えている。パーツ高となる要因として、経常収支が黒字であることは最大のポイントである。パーツ高進行によって貿易収支のマイナスが懸念されるものの、タイ中銀が発表した1月貿易収支は\$1,331Mと大幅の黒字を維持しており、さらに1月経常収支は\$5,211M(予想\$4,400M)と予想を大幅に超える黒字となった。引続き国際収支統計に懸念は見られないものと推測される。さらに、タイのGDPであるが、こちらは若干、予想対比で下振れした結果が2月に発表されている。しかしながら、第4QGDPは4.0%と引続き4%近辺を維持しており、予想対比悪かったものの、引続き高い位置で推移できていることが確認されている。低インフレ率かつ金融政策にも変化が無いことも海外投資家をタイへの投資に向かわせているひとつの要因であることを勘案し、パーツ高の流れに変化がないもの予想している。一方で、ドル安からの1月のような急激なパーツ高進行は想定していない。むしろ、27日に行われたパウエルFRB議長の議会証言の通り、利上げ見通しの引き上げ等によって、ドル高も同時に予想されることから、緩やかなパーツ高になるものと予想する。

今月のつづやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』
 タイにおけるオリンピックに対する関心は全くというほど聞こえて来ません。巷を見回しても今、オリンピックやってるの?と思うほど、マスコミも全く報道しておりません。むしろ、東南アジア競技大会(SEA GAMES)に対する注目度がオリンピックを上回ります。それはさておき、タイ王国の夏季オリンピック参加は1952年のヘルシンキオリンピックとなります。以降、1980年のモスクワを除いて、毎年参加しております。また、南国のタイではありますが、冬季オリンピックへは、2002年のソルトレイクシティから参加開始したとのこと。今開催中の平昌オリンピックにも4名の選手が参加しております。あまりにも注目されていないオリンピックですが、実はメダルの獲得実績もあります。夏季オリンピックでの「重量挙げ」・「ボクシング」・「テコンドー」といった競技で獲得しておりますが、過去累計の金メダルは9個に上ります。さすが、ムエタイが盛んな国だけあり、こういった競技では非常に強いようです。また、タイは体を鍛える人が多く、いろんな公共の場(公園等)にジムにおいてあるようなマシンがおり、大勢の人が体を鍛えている光景をよく目にします。そんなことで、「重量挙げ」も強いのかと思ってしまいます。一方で、冬季オリンピックにおけるメダル獲得は未だありません。さすがに常夏の国、タイではウィンタースポーツがあまり盛んでないせいですが、冬季オリンピックの競技は不利なのかと思います。今年にはオリンピックイヤーですが、タイでは全くといっていいほど話題になりません。

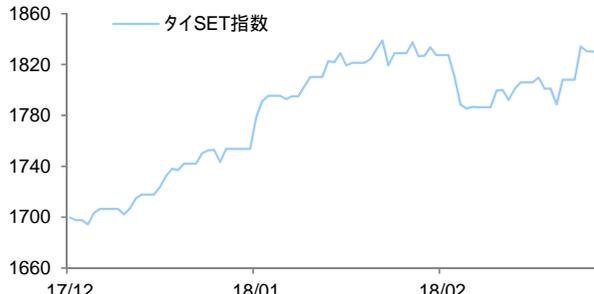
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	消費者物価指数(前年比)	1月	0.80%	0.68%	0.78%
2/1	CPIコア(前年比)	1月	0.66%	0.58%	0.62%
2/5	消費者信頼感景気指数	1月	-	66.20	65.20
2/14	タイ中央銀行政策決定会合(MPC)	2/2	1.50%	1.50%	1.50%
2/19	GDP(年率)	第4Q	4.30%	4.00%	4.30%
2/19	GDP Annual YoY	2017	3.90%	3.90%	3.20%
2/21	輸出(通関ベース/前年比)	1月	11.05%	17.60%	8.60%
2/28	輸出(前年比)	1月	-	16.70%	9.30%
2/28	貿易収支	1月	-	\$1,331M	\$1,544M
2/28	経常収支	1月	-	\$5,221M	\$3,856M

マレーシアリング相場

予想レンジ: **USD/MYR 3.8600 ~ 3.9600**
MYR/JPY 26.39 ~ 28.17
JPY/MYR 3.5500 ~ 3.8800

マレーシアみずほ銀行 山田 輝彦

先月の為替相場

2月のリングgitは売られる展開となった。

月初2日に3.88台半ばで始まったリングgitは、同日夜の1月米雇用統計の発表を前に様子見姿勢が強まりほぼ動きがなかったが、週明けにはその雇用統計発表後の米株の急落を受けてリングgit売りが強まった。その後も世界的に株安に見舞われ、以降も不安定な値動きが続く中、リスクオフの動きが強まりリングgitは9日には3.9430まで売り込まれた。その後は株式市場が落ち着きを取り戻してきたことで19日には3.8855まで買い戻されたが、ドル買戻しの動きも相俟って結局リングgitは3.91台半ばで取引されている。(23日17時現在)

今月の見通し

3月のリングgitは引き続き神経質な展開を予想。

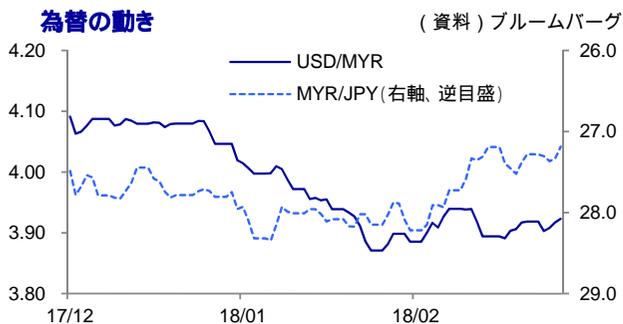
先月は米株下落をきっかけに世界的に株式市場が下落したことで、リスクオフの動きが強まりリングgitは結果として弱含む展開となった。その株式市場は落ち着きを取り戻しつつあるが、これまで一辺倒にリングgit高が進んでいただけに現状リングgitの戻りは鈍い。3月のリングgitは引き続き株式市場を中心に海外市場の動きに振られる展開となるが、これまでの強気な株式市場に冷や水が浴びせられた状況で従来のようなリスクオン地合いが早急に戻ってくるとは考えにくく、方向感が出にくいのではないかと。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

マレーシアというお国柄、冬季オリンピック種目に取り組みアスリートはいないんだろうと思っていたところ、今回のオリンピックでは2種目に2選手が参加していました。1人は男子回転アルペンスキー、もう一人は男子フィギュアスケートとのことですが、そもそも競技人口が少ないので話題に上ることも少ない感じです。従ってスポーツ好きな人が国を応援するというよりウィンタースポーツの祭典として観戦を楽しんでいるようです。

そんな私も恥ずかしながらほぼ今回のオリンピックをライブで観戦することもなく、ケーブルテレビのNHKプレミアムで試合結果だけを見ているだけなのですが、放映権の影響か、表彰式以外は全て静止画で音声のみという非常にストレスが溜まるだけなので、新聞かネットの記事で結果だけ読むことにしました。



先月の注目イベント (資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/7	輸出(前年比)	12月	13.6%	7.9%	15.2%
2/7	輸入(前年比)	12月	12.7%	4.7%	14.5%
2/7	貿易収支(MYR)	12月	9.31B	7.30B	9.95B
2/9	鉱工業生産(前年比)	12月	4.6%	2.9%	5.0%
2/9	製造業売上(前年比)	12月		9.4%	10.9%
2/14	GDP(前年比)	4Q	5.8%	5.9%	6.2%
2/14	経常収支(MYR)	4Q	11.0B	12.9B	12.5B
2/22	外貨準備高(USD)	2/15		103.6B	103.7B
2/28	CPI(前年比)	10月	2.8%		3.5%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13400 ~ 13800
 IDR/JPY 0.77 ~ 0.81
 JPY/IDR 123.00 ~ 130.00

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 河合 良介

先月の為替相場

2月のドルルピアは、13385～13690のレンジでの推移となり、本欄での予想に反し、ルピア軟調(ドルルピア上昇)な展開となった。

2月2日発表された米1月雇用統計にて平均時給が予想を大幅に上回ったことに端を発した米金利上昇に加え、市場では、ムーディーズによるインドネシア格上げ期待が醸成されていたものの、2月6日、同社が据置を発表したことで、海外投資家の資金流出が加速したことがその背景。

13385近辺でスタートしたドルルピアは、1日発表されたインドネシア1月CPIは、前年比+3.25%とほぼ市場予想通りとなり、反応は限定的。しかしながら、2日米1月雇用統計にて平均時給が予想を上回り米金利が上昇。また市場は、ムーディーズによるインドネシア格上げを期待していたが、6日は同社が据置を発表したことで、海外投資家の資金流出を加速させる結果となり、ドルルピアは、5、6日の二日間で約200ポイント上昇した。

一方で、5日発表されたインドネシア第4四半期GDPは、前年同月比+5.19%とほぼ予想通りの結果に。また、7日発表されたインドネシア1月外貨準備高は、前月比+18億ドル増加し、1月の旺盛な海外からの資金流入を確認する格好となった。

9日発表されたインドネシア第4四半期経常収支は、57.6億ドルの赤字(第3四半期は45.6億ドルの赤字)と前期比赤字幅を拡大させ、ドルルピアは14日には13660近辺まで上昇。その後、月中盤にドルルピアは下落する場面も見られたが、月末の輸入企業によるドル買い需要もあり、ドルルピアは、22日には一時13690をつけた。

2月23日現在、ドルルピアは、13665近辺での取引となっている(終値ベース)。

15日、インドネシア中銀が開催した定例会合では、市場予想通り、5か月連続で据え置きとした。

今月の見通し

今月のドルルピアは、海外投資家の資金流出に、一旦歯止めがかかるのか否か、非常に重要な月になると据えている。

2018年1年を通じた予想は、年序盤は大手格付会社ムーディーズによるインドネシア格上げ期待(フィッチは12月に格上げ済)を背景にルピア堅調(ドルルピア下落)、その後、材料出尽くしと、インドネシア経常収支の赤字幅拡大を背景に、徐々にルピア軟調(ドルルピア上昇)な展開を予想していた。

先月発表されたムーディーズによるインドネシア格付の据え置きは、海外投資家の投資意欲を削ぎ、米金利上昇が、海外投資家の資金流出に拍車をかけた。海外投資家によるインドネシア国債の保有残高は、12月末:836兆ルピアをスタートに、1月23日:880兆ルピアまで増加、しかしその後減少に転じ、2月22日:855兆ルピアとなっている。

米金利上昇が一旦落ち着けば、海外投資家の資金流入の回復も期待できるが、やや買い材料難。加えて、先月発表された第4四半期経常収支は、予想通り赤字幅を拡大、また1月貿易収支も2か月連続の赤字と、ドルルピアの上昇要因には事欠かない状況であり、当初想定よりも、ドルルピアの上昇トレンドが始まったと考えた方が良いかもしれない。

注目ポイントは、過去最高を記録し、唯一のポジティブ材料である外貨準備の動向であろう。先月のドルルピア上昇の過程で、インドネシア中央銀行が、介入のため外貨準備を消費したか、そのレベルに注目したい。

また、インドネシア中銀の金融政策は、不安定な海外動向を勘案、5か月連続の据え置きとなる公算が高い。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

インドネシアは常夏の国でもあり、今回の冬季オリンピックにも参加していません。(ASEAN各国から、ごく少数の参加があったようですが。)

ですので、インドネシアの方々には、雪を見たい、スキーをしてみたい、という好奇心から、冬の日本を目指しますが、競技としての冬モノスポーツには興味がないでしょう。ですので、冬季オリンピックに興味もないでしょうし、ローカルTVでも放映もされていないのでないでしょうか(すみません、勝手な推測です。)

一方、夏季オリンピックに目を向けると、過去30個のメダルを獲得しています。そのうち、20個がバトミントン。

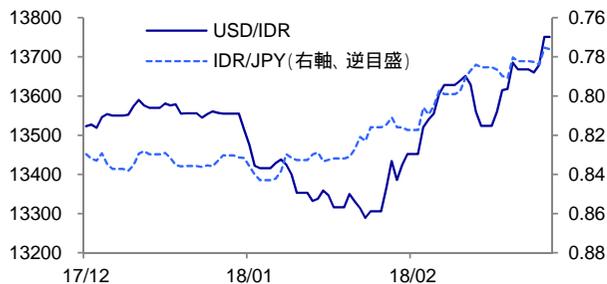
インドネシアでは、日本の親子のキャッチボールの感覚で、バトミントンが盛んです。

「昨日何してたの?」と聞くと、「家族でバトミントン」という答えが返ってくることもしばしば。

冬季オリンピックにて、インドネシアがメダルを獲得する日は来るのでしょうか。

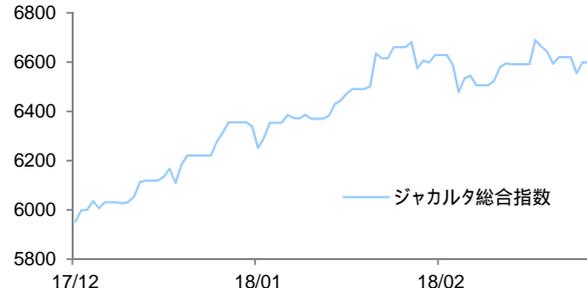
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	CPI(前年同月比)	1月	3.33%	3.25%	3.61%
2/5	GDP(前年比)	4Q	5.10%	5.19%	5.06%
2/7	外貨準備高(USD B)	1月	-	132.0	130.2
2/9	経常収支(USD M)	4Q	-	-5,761	-4,557.0
2/15	輸出(前年比)	1月	7.30%	7.86%	7.53%
2/15	貿易収支(USD M)	1月	280	-677	-220
2/15	BI 7daysリバースレポ金利		4.25%	4.25%	4.25%

(資料)ブルームバーグ

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 51.50 ~ 53.00
 PHP/JPY 2.00 ~ 2.10

マニラ支店 樋上 陽一

先月の為替相場

2月のドルペソ為替相場は1ドル=51.30ペソで取引開始。
 2日に発表された米1月雇用統計を受けたドル買いで、5日には一時1ドル=51.67ペソで取引される場面も。

しかしながら、6日にフィリピン統計庁が発表した1月CPIは前年同月比4.0%の上昇。8日のフィリピン中銀金融政策委員会での利上げを見込む市場参加者が増え、一転ペソの買い戻しが優勢に。
 7日には1米ドル=51ペソ丁度レベルまでドルが弱含んだ。

フィリピン中央銀行は8日、政策金利の据え置きを決定。
 また9日に発表された比12月貿易収支は、市場予想(30億ドルの赤字)、前月実績(38億ドルの赤字)から赤字幅が拡大し、過去最大の40億ドルの赤字を記録。
 ドルペソ為替相場は再びドル買いの圧力が高まり、13日に1ドル=52ペソ台をつけた。

15日のオンショア為替市場の取引終了後、フィリピン中央銀行は金融機関が預金残高に対して、中銀に預け入れる預金準備率の引き下げを発表。金融緩和につながることからドルペソ為替相場は19日には一時、12年ぶりのドル高ペソ安水準となる1ドル=52.45ペソまで上昇した。

その後、米FOMC(連邦公開市場委員会)議事要旨(1月30~31日)でFOMCメンバーが米国のインフレや景気見通しについて自信を強めていることなどが明らかとなり、ドル高ペソ安圧力が更に強まってもおかしくない状況だったが、アジア通貨が全般的に堅調推移したことやドルペソ為替相場の急激な動きを抑制する当局介入が強く意識され、1ドル=52ペソ丁度レベルで方向感を探る展開に。(2月26日現在)

今月の見通し

年初から急ピッチで進んだドル高ペソ安だが、1米ドル=52ペソ台をつけたこともあり、上昇に一服感が出るかに注目したい。

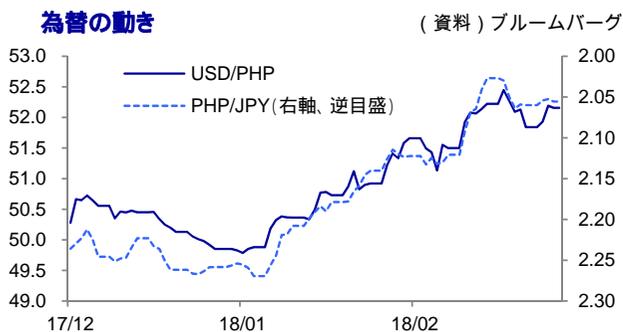
フィリピン中銀の金融政策については、左記の通り、2月は金融政策が維持された。1月に施行された税制改革法と原油価格上昇でインフレ圧力は高まっており、市場参加者の間では利上げに踏み切るとの見方も強かったものの、エスペニリヤ中銀総裁は会見で、世界経済見通しの不透明さによる下押し要因などを考慮した結果と説明。

一方、フィリピン中銀は2018年のインフレ率見通しをこれまでの+3.4%から、インフレターゲットの上限を超える+4.3%に上方修正している(2019年の見通しも+3.2%から+3.5%に)。

また、15日に発表した預金準備率の引き下げは、財政支出を賄うための金融緩和策であるが、超金融緩和、過剰流動性がもたらすインフレとペソ安進行リスクが懸念される中で、次回(3月22日)の金融政策のかじ取りが大きな注目となっている。市場では利上げを見込む参加者が多いようだ。

預金準備引き下げで市場では材料視されなかったが、2017年12月のOFW(海外在留フィリピン人)送金金額(銀行経由のみ)は27.4億米ドルで、過去最高だった17年3月の25.6億米ドルを上回り、前年同月比で7.1%増となった。

2018年1月の国際総合収支が赤字に転落していることは懸念材料だが、海外からの外貨送金トレンドが増加基調であることが確認されれば、ペソ安圧力緩和に働くことになりそう。(同左)



先月の注目イベント

発表日	イベント
	上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 63.60 ~ 65.50
INR/JPY 1.63 ~ 1.71

アジア・オセアニア資金部 ムンバイ室 田川 順也

先月の為替相場

【2月の米ドル/インドルピーは上昇した】

63.69近辺で2月取引をスタート。2/1につけた日中安値63.485が当月の安値となり、公表された米FOMC声明文で景気判断および物価判断がともに上方修正されると市場はタカ派と受け止め、ドルが買われる展開にドル/ルピーも上昇。同時にインドでは予算が発表され、来年度予算が予想を下回るものであったことに加え、今年度の財政赤字予想が引き上げられたことも相まってルピーは売られやすい地合いになった。

2週目に入ると米株式市場の急落を発端にグローバルに大幅な株安が進展。リスク回避的な動きの中で、新興国通貨が売られる展開。ドル/ルピーも緩やかに上昇し64.40まで上昇。

3週目週初に入るとフロー主導でドル/円が107円、ユーロ/ドルが1.25と節目を抜けて走ると米ドルは全面安となり、その場面ではドル/ルピーも63.80まで戻りを試したが勢い続かず。

4週目はギャップアップしてオープン。調整の動きに全般的にアジア通貨安となる中、インドでは22日にはフォワードマーケットで大口のフローが断続的に出続け、スポットマーケットも荒っぽい動きとなり一時昨年11月半ば以来の高値となる65.10をタッチ。その後は水準をやや戻し、64.795レベルで26日の取引を終えた。

【2月のインドルピー/日本円は下値を追う展開】

1.717レベルで当月取引をオープン。月初の数日はオープンと同じレベルで揉みあったが、既述のリスクオフムードの中でドル円が109円を割り込んでの推移となり、3週目にはストップロスオーダーを巻き込みながら一時105円台に突入するとルピー/円も1.70、1.68、1.66と節目を次々と突破。ドル/ルピーが65を突破するタイミングで15か月ぶりのルピー安/円高水準となる1.64割れを示現。その後も安値圏での推移となり、26日クローズを1.645レベルで迎えた。

今月の見通し

【3月の米ドル/インドルピーは上値の重い展開を想定】

先月はドルが荒っぽい動きとなったが、ドルに関する見通しは従前と変更はない。ドル高の頼みの綱である米利上げについては現状で年末まで3回の利上げが既にマーケットに織り込まれていることを考えると、直近で利上げというテーマがドル高のドライバーになることは難しそうである。併せて、今年に入り再度確認できているようにトランプ氏の通商政策・為替政策はドル安を志向している点も注意が必要である。

インドの要因に目を向けると、今月経済指標は微細に減速したとはいえ、PMIと鉱工業生産は好調であるし、金・原油を除いた輸入量も増加していることから、内需の強さも確認された。更に最重要である物価についてはインド準備銀行(中央銀行、RBI)のターゲットの中央値である4%を3か月連続で上回る結果となっている。

2月金融政策委員会(MPC)議事録を参照すると、政策金利は据え置かれたものの物価のアップサイドリスクが意識されており、総裁はインフレが“generalised”したと表現している。また今回合会でサプライズであったのは1人の常任理事が「利上げ」に投票していた点である。同氏の主張は物価が5%を超え、国内実質金利が1%未満となっていることにフォーカスし、ビハインド・ザ・カーブに陥っている、と明言した。

インドの経済指標および中央銀行は市場参加者の利上げ期待をサポートする状況となっており、いままぐの利上げ決断とはならないとしてもルピーの下支え材料となりそうだ。

65レベルをレンジ上限とし、今月は上値の重い展開を想定している。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のオリンピック事情』

インドは冬季オリンピックではまだひとつもメダルを取っていません、今年は、ではなくこれまで一度も。2012年のロンドンオリンピック入場行進でインド選手団に一般女性が紛れ込んだり、前回の冬季オリンピックはインドのオリンピック委員会役員の汚職事件疑惑があったりと、競技に入る前にお騒がせしている印象。

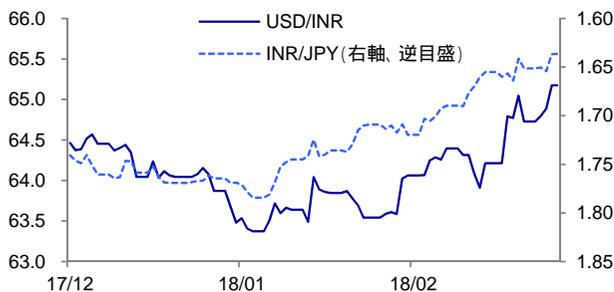
ベジタリアンが多くてあまり競争心のないとも思われるインド国民ですが、新体操ではメダルを独占できるようなバランス感覚があります。マラカーンプ(Mallakamba)というスポーツ(?)をみればそのすごさを実感していただけるかと。

ポールダンスの元祖ともいえるそうですが、個人・団体で繰り広げられるポーズは神業。女性はロープをつかいます。ポールに対して90度に脚をからめたり、片手だけでポールをつかんで全身を支えて空中でヨガポーズ、など。宇宙空間で動いているような身軽さです。私も実際の競技を間近で見たことがあります、かなり迫力があります。800年以上の歴史があるインドの伝統的なスポーツのようですが、そのすごさを世界に知らしめるにはオリンピックしかないでしょう。

ムンバイの人通りの多い広場で、幼い女の子がロープの上をバランスをとって歩いて、道行く人の足をとめているのを何度か見たことがあります。近くにいるその子の家族と思われる人たちが、観客からお金を集めて生計をたてている様子。日本だったらサーカス団員として生計をたてるか、オリンピックの器械体操のメンバーになりそうな見応えでした。彼らは路上に住んでいるような身なり。あえてそのような身なりにしているのか、それとも、このコラムを書いていたら、その女の子が気になりました。(ムンバイ支店 渡辺)

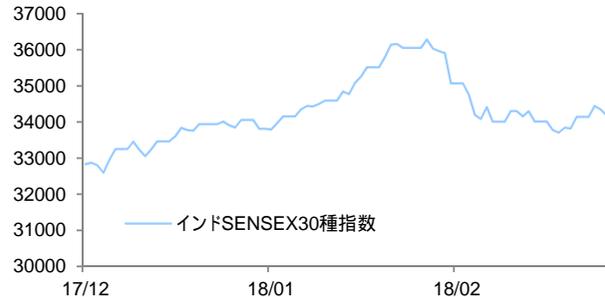
為替の動き

(資料) ブルームバーク



株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
2/1	製造業PMI	1月	-	52.4	54.7
2/12	消費者物価指数(前年比)	1月	5.10%	5.07%	5.21%
2/12	鉱工業生産(前年比)	12月	6.0%	7.1%	8.8%
2/15	貿易収支(前年比)	1月	-130億ドル	-163億ドル	-139億ドル

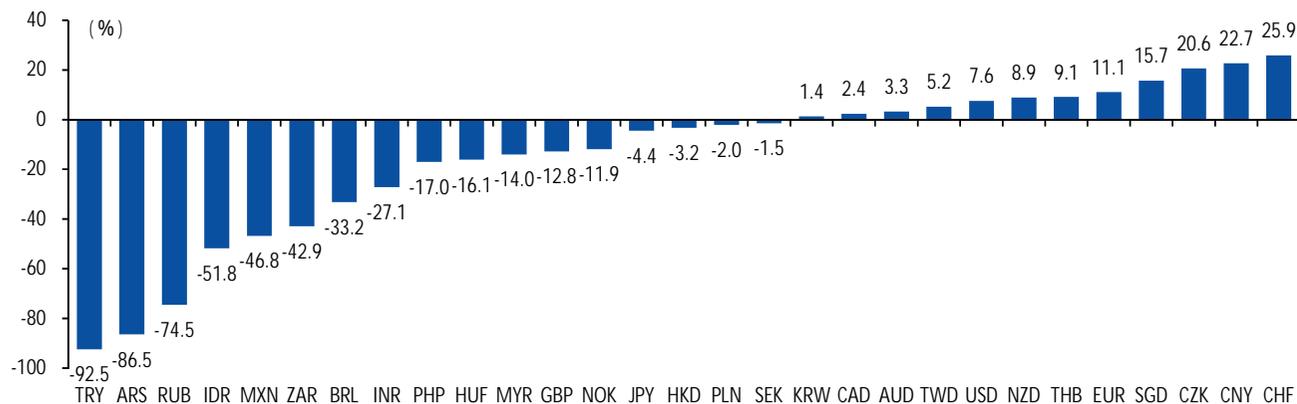
(資料) ブルームバーク

為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2017年末	2018年2月末	騰落率	株式市場	2017年末	2018年2月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	24719.22	25029.2	1.3%	-
日本	USD/JPY	112.69	106.68	-5.3%	日経平均株価	22764.94	22068.24	-3.1%	2.4%
ユーロ圏	EUR/USD	1.2005	1.2194	1.6%	ドイツDAX指数	12917.64	12435.85	-3.7%	-3.7%
英国	GBP/USD	1.3513	1.376	1.8%	ロンドンFTSE100指数	7687.77	7231.91	-5.9%	-7.6%
豪州	AUD/USD	0.7809	0.7762	-0.6%	S&P/ASX200指数	6065.129	6015.959	-0.8%	-0.2%
カナダ	USD/CAD	1.2571	1.2831	2.1%	S&Pトロント総合指数	16209.13	15442.68	-4.7%	-6.7%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.5068	6.331	-2.7%	上海総合	3307.172	3259.408	-1.4%	1.3%
香港	USD/HKD	7.814	7.8261	0.2%	香港ハンセン	29919.15	30844.72	3.1%	2.9%
インド	USD/INR	63.8725	65.175	2.0%	インドSENSEX30種	34056.83	34184.04	0.4%	-1.6%
インドネシア	USD/IDR	13555	13751	1.4%	ジャカルタ総合	6355.654	6597.218	3.8%	2.3%
韓国	USD/KRW	1067.4	1083	1.5%	韓国総合株価	2467.49	2427.36	-1.6%	-3.0%
マレーシア	USD/MYR	4.0465	3.917	-3.2%	ブルサマレーシアKLCI	1796.81	1856.2	3.3%	6.7%
フィリピン	USD/PHP	49.85	52.158	4.6%	フィリピン総合	8558.42	8475.29	-1.0%	-5.4%
シンガポール	USD/SGD	1.336	1.3248	-0.8%	シンガポールST	3402.92	3517.94	3.4%	4.3%
台湾	USD/TWD	29.733	29.281	-1.5%	台湾加権	10642.86	10815.47	1.6%	3.2%
タイ	USD/THB	32.574	31.49	-3.3%	タイSET	1753.71	1830.13	4.4%	7.9%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2018年1月時点)



実質GDP成長率

	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2017Q4	2016	2017
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.2	2.8	1.8	1.2	3.1	3.2	2.5	1.5	2.3
日本*	1.4	0.8	1.8	1.2	2.5	2.2	0.5	0.9	1.6
ユーロ圏	1.8	1.7	1.9	2.1	2.4	2.8	2.7	1.8	
英国	1.8	2.0	2.0	2.1	1.9	1.7	1.4	1.9	1.7
豪州	3.3	2.1	2.4	1.8	1.9	2.8		2.6	
カナダ*	-1.0	4.3	2.3	3.7	4.3	1.7		1.4	
エマージングアジア									
中国	6.7	6.7	6.8	6.9	6.9	6.8	6.8	6.7	6.9
香港	1.8	2.2	3.3	4.3	3.9	3.7	3.4	2.1	3.8
インド	8.1	7.6	6.8	6.1	5.7	6.5	7.2	7.1	
インドネシア	5.2	5.0	4.9	5.0	5.0	5.1	5.2	5.0	5.1
韓国	3.4	2.6	2.4	2.9	2.7	3.8	3.0	2.8	3.0
マレーシア	4.0	4.3	4.5	5.6	5.8	6.2	5.9	4.2	5.9
フィリピン	7.1	7.1	6.6	6.4	6.7	7.0	6.6	6.9	6.7
シンガポール	2.0	1.7	3.7	2.5	2.8	5.5	3.6	2.0	3.6
台湾	1.0	2.0	2.8	2.6	2.3	3.2	3.3	1.4	2.9
タイ	3.6	3.1	3.0	3.4	3.9	4.3	4.0	3.3	3.9

(注)インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

失業率

	17/07	17/08	17/09	17/10	17/11	17/12	18/01	2016	2017
	(%)							(%)	
先進国									
米国	4.3	4.3	4.4	4.2	4.1	4.1	4.1	4.9	4.4
日本	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.7	2.8	3.1	2.8
ユーロ圏	9.1	9.0	9.0	8.9	8.8	8.7	8.7	10.0	9.1
英国	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.4		4.9	4.5
豪州	5.6	5.6	5.5	5.5	5.4	5.4	5.6	5.7	5.6
カナダ	6.5	6.3	6.2	6.2	6.2	5.9	5.8	7.0	6.3
エマージングアジア									
中国			4.0					4.0	4.0
香港	3.1	3.1	3.1	3.1	3.0	3.0	2.9	3.4	3.1
インドネシア		5.5						5.6	5.4
韓国	3.8	3.5	3.7	3.7	3.6	3.7	3.7	3.7	3.7
マレーシア	3.5	3.4	3.4	3.4	3.3	3.3		3.5	3.4
フィリピン	5.6			5.0				5.5	5.7
シンガポール			2.2		2.1			2.1	2.2
台湾	3.8	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7	3.7	3.9	3.8
タイ	1.2	1.1	1.2	1.3	1.1	1.0	1.3	1.0	1.2

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

消費者物価上昇率

	17/08	17/09	17/10	17/11	17/12	18/01	18/02	2016	2017
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	1.9	2.2	2.0	2.2	2.1	2.1		1.3	2.1
日本	0.7	0.7	0.2	0.6	1.0	1.4		-0.1	0.5
ユーロ圏	1.5	1.5	1.4	1.5	1.4	1.3	1.2	0.2	1.5
英国	2.9	3.0	3.0	3.1	3.0	3.0		0.7	3.0
豪州		1.8			1.9			1.3	1.9
カナダ	1.4	1.6	1.4	2.1	1.9	1.7		1.4	1.6
エマージングアジア									
中国	1.8	1.6	1.9	1.7	1.8	1.5		2.0	1.6
香港	1.9	1.4	1.5	1.6	1.7	1.7		2.4	1.5
インド	3.3	3.3	3.6	4.9	5.2	5.1		5.0	3.3
インドネシア	3.8	3.7	3.6	3.3	3.6	3.3		3.5	3.8
韓国	2.6	2.1	1.8	1.3	1.5	1.0		1.0	1.5
マレーシア	3.7	4.3	3.7	3.4	3.5	2.7		2.1	3.9
フィリピン	3.1	3.4	3.5	3.3	3.3	4.0		1.8	3.2
シンガポール	0.4	0.4	0.4	0.6	0.4	0.0		-0.5	0.6
台湾	1.0	0.5	-0.3	0.3	1.2	0.9		1.4	
タイ	0.3	0.9	0.9	1.0	0.8	0.7		0.2	0.7

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

経常収支

	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2017Q4	2016	2017
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.4	-2.4	-2.4	-2.3	-2.4	-2.3		-2.4	
日本	3.5	3.6	3.8	3.8	3.8	4.0	4.0	3.8	4.0
ユーロ圏	3.5	3.4	3.3	3.3	3.0	3.2		3.3	
英国	-5.8	-6.4	-5.8	-5.3	-5.2	-4.6		-5.8	
豪州	-3.9	-2.9	-1.1	-1.3	-2.2	-2.0		-2.9	
カナダ	-3.6	-3.6	-3.2	-2.9	-2.8	-2.8		-3.2	
エマージングアジア									
中国	2.4	2.4	1.8	1.5	1.3	1.0	1.4	1.8	1.4
香港	4.6	4.1	3.8	3.4	3.7	4.4		3.8	
インド	-0.8	-0.5	-0.6	-0.7	-1.3	-1.4		-0.6	
インドネシア	-2.2	-2.2	-1.8	-1.5	-1.4	-1.3	-1.7	-1.8	-1.7
韓国	8.0	7.4	7.0	6.3	5.5	5.6		7.0	
マレーシア	1.9	1.9	2.1	2.0	2.6	3.0	3.0	2.1	3.0
フィリピン	1.1	1.0	0.2	-0.2	-0.3	-0.3		0.2	
シンガポール	18.8	19.5	19.0	19.9	19.3	18.8	19.3	19.0	19.3
台湾	14.3	13.6	13.4	12.8	12.6	13.2	14.5	13.4	14.5
タイ	10.9	12.1	11.7	11.1	10.6	10.8	10.8	11.9	

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	1.25 - 1.50	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2017/12/13	+25	2018/1/31	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2018/1/23	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2018/1/23	現状維持
英国	バンク・レート	0.50	引き締め: 2017/11/2	0.25	2017/11/2	+25	2018/2/8	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2018/2/6	現状維持
カナダ	翌日物金利	1.25	引き締め: 2017/7/12	0.50	2018/1/17	+25	2018/1/17	+25bp
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レポ金利	6.00	緩和: 2015/1/15	8.00	2017/8/2	-25	2018/2/7	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.25	緩和: 2015/2/17	7.75	2017/9/22	-25	2018/2/14	現状維持
韓国	7日物レポ金利	1.50	引き締め: 2017/11/30	1.25	2017/11/30	+25	2018/2/27	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.25	引き締め: 2018/1/23	3.00	2018/1/23	+25	2018/1/23	+25bp
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2018/2/8	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2018/2/14	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.25	緩和: 2012/3/12	15.00	2017/7/7	-25	2017/7/7	-25bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をB1レートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行